

奈良県宇陀地方の中世墓地

白石 太一郎

はじめに

- 一 発掘された宇陀の中世墓地
- 二 発掘された中世墓地の性格
- 三 現在まで存続する中世墓地
- 四 中世宇陀における葬・墓制の展開

論文要旨

奈良盆地の東南の山間部に位置する宇陀地方の中世墓地については、最近の発掘調査によってその全容が明らかにされた例がいくつかある。それら中世末に廃絶し、遺跡化した墓地に対して、この地方には中世以来現在までその利用が続いている墓地がある。小論はこの両者を総合して考察することによって、中世の宇陀における葬制と墓制の展開過程を追求しようとしたものである。

発掘された中世墓地はいずれも三〇基程度から九〇基程度の墓で構成されるもので、地上には石組をもち、多くはその上に五輪塔や箱形の石仏などの石塔類を立てていたらしい。またそれらの地下には、火葬骨を納めた火葬墓、火葬施設、土葬墓などがみられる。それらは一三世紀頃から一六世紀頃まで存続したもので、一五世紀以前には火葬墓が多く、それ以降には土葬墓が多くなる。また石塔類が多く立てられるのも一五世紀以後のようで、一六世紀前半までは五輪塔が、一六世紀後半には箱形石仏が用いられたらしい。一方現在まで続く墓地のなかにも多数の中世の石塔が遺存するものがあり、中世の段階では発掘

された墓地と同様の景観・内容・性格をもっていたと考えられる。

こうした宇陀の中世墓地は、いずれもこの地域の在地武士や有力農民の一統墓と考えられる。彼らが一三世紀頃になってこうした火葬墓地を営むようになる背景には、おそらく律宗などの下層僧侶の積極的な働きかけがあったのである。やがてこれらの墓地は次第に土葬の墓地に変化するが、さらに一六世紀後半になって織豊政権による支配秩序の変革が行われると、主として在地武士層により形成されていたこの地の中世墓地は大きな転機を迎える。その多くは廃絶して新しく成立した村の共同墓地に統合されたり、一部は地域の民衆墓をも含み込んだ地縁的な村墓に変質する。血縁関係を紐帯とする墓地から地縁関係を紐帯とする墓地に変化するのである。こうした墓地の再編成とともに葬・墓制自体も大きく変化する。それは村単位の埋め墓とは別に多くは家単位の詣り墓を営む両墓制の成立である。その成立の契機は、村を単位に行われる遺骸の処理と、家を単位に行われる祖先祭祀の矛盾の解消にあったと思われる。

はじめに

奈良盆地の東方にひろがる大和高原は、盆地部を「国中（くんなか）」とよぶのに対し「山中（さんちゅう）」とよばれる。宇陀地方は、この山中とよばれる大和高原の南半部の宇陀山地にあたり、北は都祁高原、南は吉野山地、東は三重県の伊賀、あるいは南では伊勢と境を接している。大和川水系に属する奈良盆地とは異なり、淀川水系の名張川の流域にあたっており、大和川水系の初瀬川上流から木津川水系の宇陀川流域への分水界を越える墨坂（現榛原町西峠）は、古くより大和から伊賀・伊勢をへて東国に至る交通の要衝であった。

この地方では、昭和四〇年代からの西部の口宇陀盆地北部での宅地開発、あるいは昭和五〇年代から始まった大和高原農地開拓事業などにもなつて大規模な発掘調査が実施され、各時代のさまざまな遺跡の内容が明らかにされてきた。なかでも中世の墓地がいくつか全面発掘され、その実態の一部が明らかにされたことは、奈良県内の中世墓地、とくに村落墓地の大規模な発掘調査例がきわめて少ない中で、きわめて貴重である（図1）。

一方奈良県内では、昭和三〇年代の後半以降、宇陀と同じ大和高原に位置する都祁、すなわち現都介野村の来迎寺を中心とする中・近世墓地に対する竹田聰洲氏の歴史学的・民俗学的な総合的調査・研究⁽¹⁾があり、さらに元興寺文化財研究所の木下密運・藤沢典彦・吉井敏幸氏らの大和

の惣墓やその石塔類に関する意欲的な研究⁽²⁾が進められており、中・近世の村落墓地の研究の進展には著しいものがある。前者は中世における村と墓と寺の構造的な理解にもとづき、祖先信仰との癒着に日本仏教の特質を求める竹田氏の民俗仏教論の基礎の一部をなすものであることは広く知られるとおりである。後者も惣墓の成立が惣郷や惣村とよばれる村落共同体の形成を背景にするものではあるが、その結果が「一結衆」あるいは「念仏講衆」などとよばれる共同祭祀の講によってなされたこと、さらにその中心に斎戒衆とよばれる律宗寺院の下級僧侶が存在したことなど、葬・墓制と中世仏教との具体的なかわりを明らかにしている⁽³⁾。

このように大和の中世墓地に対する歴史学的あるいは民俗学的研究が、中世の宗教史や社会史上の重要な問題提起をあいっいでなしている中にあって、大和の中世墓地の考古学的な研究はあまり活発とはいえない。

これは国中、すなわち盆地部における中世墓地の発掘調査が、高僧貴顕の墓にかたより、民衆の村落墓地については、奈良市古市町の城山中世墓地の調査⁽⁴⁾などを除いて大規模な調査がほとんど行われていないことによるものであろう。しかしながら、墓地の外部表象としての石塔類に依存する現存墓地の調査・研究をさらに発展させるには、外部表象とともに埋葬施設や埋葬の実態など下部構造との一体的把握がどうしても必要であり、そのためにも発掘をとまなう考古学的調査成果との重層的・総合的な考察が要請されるのである。

小論は、奈良県でも中世墓地の発掘調査例の比較的多い宇陀地方を取り上げ、それらの発掘例にもとづいて、考古学の立場からこの地域の中

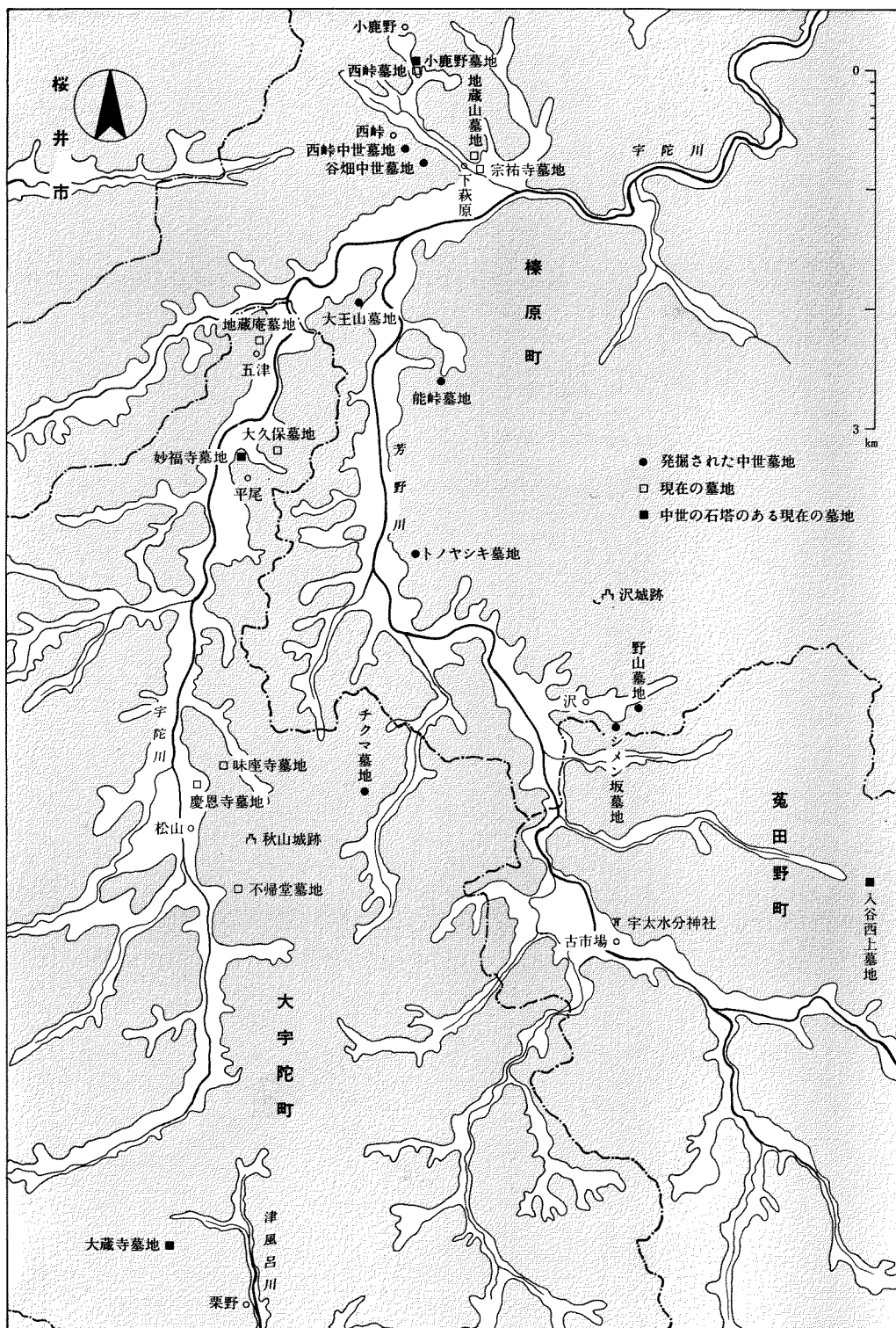


図1 宇陀地方における中世墓地の分布

世墓地の展開過程を検討しようとするものである。ただし宇陀地方の場合も、発掘調査の対象となったのは早くに墓地としての役割を終えた廃絶墓地である。この地域には、中世以来現在までその機能をはたし続けている墓地も少なくない。中世の墓地にはある時期でその役割を終え、遺跡化した墓地と現在まで存続する墓地の二者が存在するわけであり、考古学の立場から当然前者のみでなく、後者をも視野に入れた検討が必要であろう。この地域の現存中世墓地については、現在のところその一部について予備的な調査を行ったにすぎないが、今後の研究の方向を探る意味で、それらの結果をも合わせて宇陀の中世墓地について予察的な検討を試みてみた。今後に残された問題があまりにも多いが、ご批判いただければ幸いである。⁽⁵⁾

註

- (1) 竹田聰洲『民俗仏教と祖先信仰』（東京大学出版会、一九七一年）。
- (2) 木下密運「中世の念仏講衆」（『元興寺仏教民俗資料研究所年報』三号、一九七〇年）、藤沢典彦「大和の墓地と石造物―生駒・奥山墓地を中心に」（『週刊朝日百科』『日本の歴史』別冊『歴史の読み方』3 考古学への招待朝日新聞社、一九八八年）、吉井敏幸ほか『近畿における中世葬送墓制の研究調査概報』昭和五十九年度（元興寺文化財研究所、一九八五年）、吉井敏幸「中世群集墓からみた惣墓の成立」（本報告書所収）など。
- (3) この点については、細川涼一「中世大和における律宗寺院の復興―竹林寺・般若寺・喜光寺を中心に」（『日本史研究』二二九号、一九八一年）、同「河内の西大寺末寺と惣墓―西琳寺・教興寺・寛弘寺」（『中央史学』一〇号、一九八七年）など細川涼一氏の中世律宗の下級僧侶に関する一連の研究が重要な問題を提起している。これらの論文は同氏「中世の律宗寺院と民衆」（吉川弘文館、一九八七年）に再録されている。
- (4) 森下恵介ほか「古市城跡発掘調査報告」（『奈良市埋蔵文化財調査報告書』

昭和五五年度、一九八一年）。

- (5) この地域の最近の発掘調査の成果にもとづく中世墓地の研究としては、楠元哲夫「中世後半期における集団墓地―とくにその生成と展開をめぐる―」（『末永先生米寿記念献呈論文集』坤 一九八五年）、同「中世集団墓地の地域相―都市と田舎―」（同志社大学考古学シリーズⅢ『考古学と地域文化』所収、一九八七年）がある。各墓地の年代比定をはじめその結論にも同意しがたいが、教えられるところも少なくない。

一 発掘された宇陀の中世墓地

まず宇陀地方における中世墓地の発掘調査の成果の中から、ほぼ墓地の全体像を明らかにしていると思われる六例について概観してみよう。

(一) 榛原町谷畑中世墓地

榛原町萩原字谷畑に位置した中世墓地で、一九七三年に奈良県立橿原考古学研究所により発掘調査が行われ、筆者らが調査を担当した。⁽¹⁾伊勢街道沿いの宿駅であった萩原の街の西方、近鉄大阪線榛原駅と西峠の集落の間の比高約四〇メートルの山丘上に位置し、五輪塔や石仏などの石造物が散乱していたところから中世墓地の存在が知られたものである。直径約一〇メートル、高さ二メートルほどの円形の高まりがあり、この高まりとそのまわりに墓地が営まれていた。ただその東側の部分はすでに榛原第一小学校の校地の造成で削られ墓地の一部が失われていたが、墓地全体のほぼ八割方の調査が行われている（図2）。

発掘調査の結果、約六〇基にのぼる、地上に石組をとまなう中世の墓

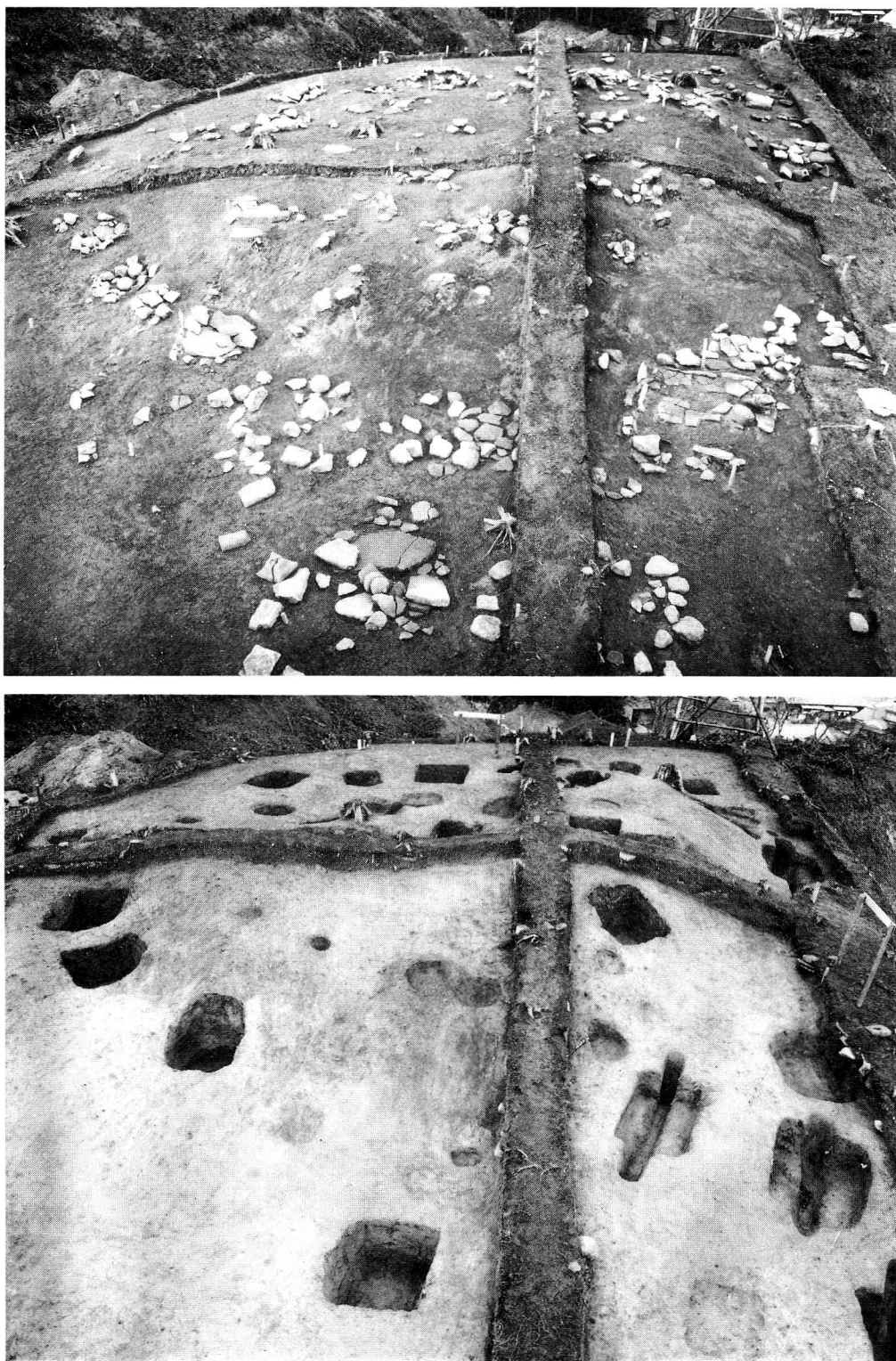


図2 榛原町谷畑中世墓地（上 地上の石組、下 地下の遺構）

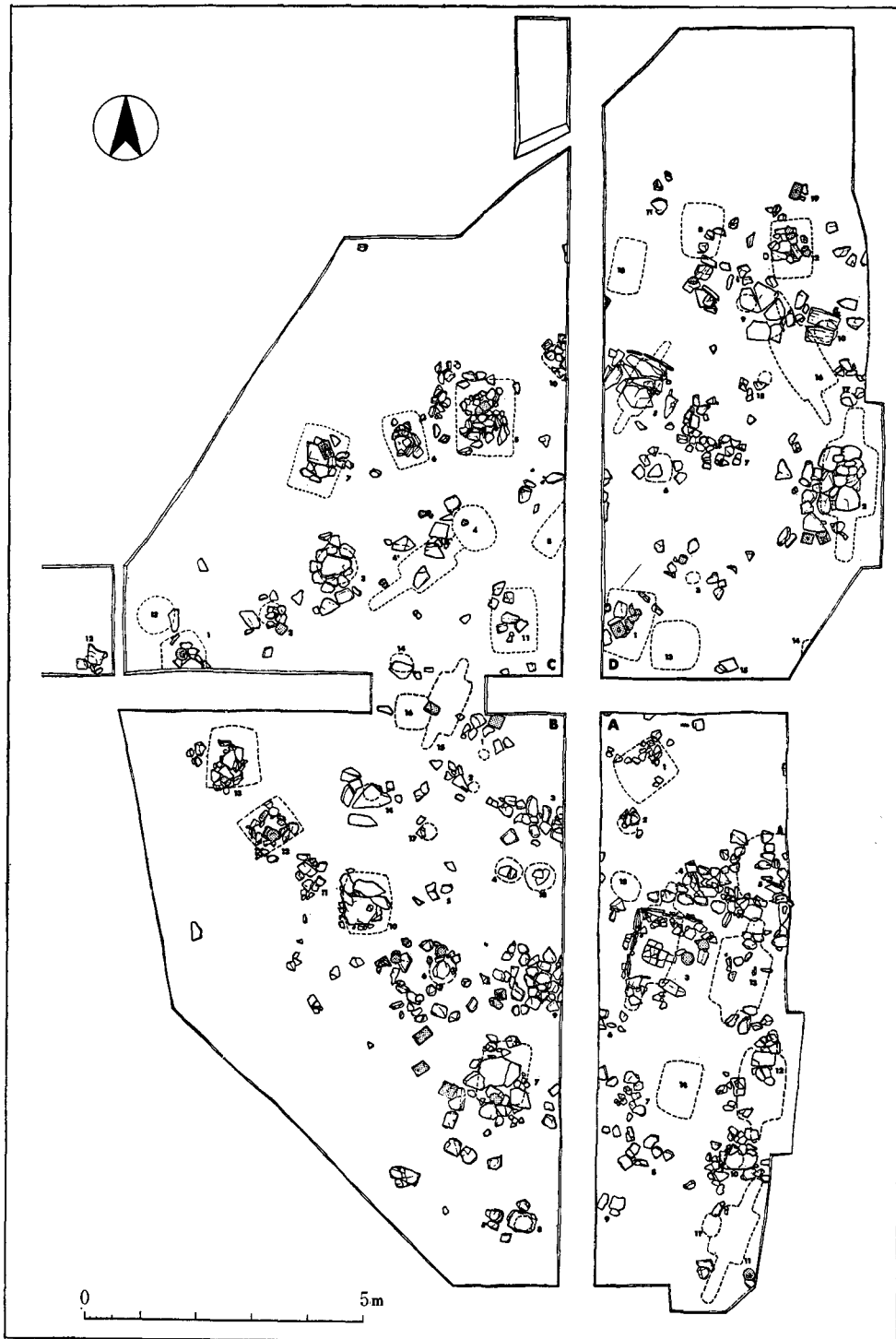


図3 榛原町谷畑中世墓地の調査図

ないし火葬施設が検出されている(図3)。外部施設の遺存状態はあまりよくないが、基本的には川原石や板石を一边〇・七〜一・五メートル程度の方形に配したもので、そのうち三基に一基の割合で組合せ式の石製五輪塔の一部がともなっていた。いずれも小型のもので復元高五〇〜七〇センチ前後のものが中心をなす。さらに箱仏とよばれる屋蓋をとまなう方形の箱形の石仏が本体・屋蓋とも三個体ずつ出土しており、箱形石仏を外部表象としたものも何基が存在したことが知られる。出土した五輪塔のうち最も多い空風輪の部分でも一四個体であるが、すでに失われたものなどをも考えると、本来は外部に石組をもつ墓のうち半数以上は五輪塔をとまない、さらに全体の一割程度は箱形石仏をとまなっていたと推定される。それらの石組の外部施設の下からは、方形の土壙をもつ土葬墓一七基、火葬骨を納めた小土壙をもつ火葬墓約三〇基、火葬施設と考えられる長方形土壙一〇基が検出されている。土葬墓の多くは長さ一・二メートル、幅一・〇メートル、深さ〇・八メートルほどの長軸を南北におく長方形の土壙をもち、人骨の遺存していたB一〇号墓、D一〇号墓は東向きの、C一〇号墓は西向きのいずれも側臥屈葬であった。木棺の構造は不明であるが、土壙の形態からも方形箱形のものであったと推定される。副葬品はほとんどみられないが、一基のみ「開元通宝」一枚と不明一枚の合わせて二枚の銅銭を納めていた。

火葬墓約三〇基のうち土器・陶器の蔵骨器をもつのは六基のみで、その内訳は瀬戸四耳壺一、瓦質火鉢一、土師器鍋二、土師器羽釜一、瓦質鍋一で、他はすべて蔵骨器は遺存せず、火葬骨の出土状態から本来有機

質の蔵骨器に納められていたものと思われる。副葬品はほとんどみられないが、土師器鍋の蔵骨器をもっていたC四号墓では土師器小皿五枚がともなっていた。

火葬施設は、いずれも長さ一・〇〜一・五メートル、幅〇・七〜一・二メートルほどの長方形の平面をもつ土壙で、その底部から両端のさらに外部にまでのびる溝状の煙道をもつ(図4)。いずれも壁面は火をうけて赤褐色を呈し、さらに内部に灰・炭・火葬骨片が遺存するところから火葬施設であることは疑いなかろう。不明なものもあるが、その多くは地上に土葬墓や火葬墓と同じような石組で五輪塔などを立てた外部施設がともなっていたと考えられる。土壙内には灰・木炭にまじる骨片と



図4 榛原町谷畑中世墓地の火葬施設(A3号)

は別に火葬骨がブロックになって遺存しているものが多く、有機質の蔵骨器に入れられて火葬土壌内に納められたものであろう。火葬骨のブロックの上部を常滑甕の底部や瓦質の摺鉢で覆ったものもみられた。したがってこれらの多くは火葬施設であるとともにそれ自体火葬墓でもあったことが知られる。なお火葬土壌内に土師器小皿をともなうものが多いことは注目される。それらの土師器小皿の中には底部に二つの小孔を穿ったものが少なくない。

谷畑中世墓地の遺物のうち、外部表象の石造物には紀年銘をもつものはないが、火葬墓の蔵骨器には、一三世紀の中葉～後半にさかのぼる瀬戸の四耳壺(図5)、器高が低く底部が平らでくの字形に外反する口縁部をもつ一三世紀後半の瓦質鍋、水平近くに外反する口縁部をもつ一四世紀末～一五世紀はじめの土師器鍋、一五世紀前半の瓦質火鉢、直角に近く内折する口縁部をもつ特長から一五世紀後半と考えられる土師器羽釜など一三世紀から一五世紀のものがみられる。また火葬施設出土の土師器小皿には外面の底部立ち上がり付近から上部に横ナデを施した一三世紀にまでさかのぼる可能性のあるものが含まれている。小型の五輪塔については奈良市古市城山墓地で同じような形態のものが多数出土しているが、そのうちに康正二年(一四五六)、文明一五年(一四八三)、明応四年(一四九七)、永正五年(一五〇八)などの年号銘を地輪に刻したものがあり、一五世紀後半から一六世紀はじめに盛んに造られたものであることが知られる。また古市城山墓地の屋蓋をともなう箱形の石仏には文亀二年(一五七一)の銘のものがあり、この種の箱仏が一六世紀後半を



図5 榛原町谷畑中世墓地出土の瀬戸四耳壺

中心に造られたものであることを示している。

こうした出土遺物の年代から判断すると、この谷畑中世墓地は、造墓の最も盛んな時期は一五～一六世紀であるとしても、一三世紀から一六世紀後半までの間、ほぼ断絶なく墓地としての機能を果たしたものである。一三・一四世紀にさかのぼるものがいずれも火葬ないし火葬施設にかかるものであることから、最初は火葬施設をともなう火葬墓地としてはじまり、おそらく一五世紀代から土葬に転換したものであろう。ただ火葬墓や火葬施設にも五輪塔の型式などから一五世紀後半に下るものもあり、一五世紀代には両者が並び行われた可能性が大きい。

こうした年代観をもとに、あらためて墓地全体をみると、墓地中央の最高所には数基の土葬墓があり、その周りをとり囲むように火葬施設や

火葬墓がひろがり、さらにその外側に土葬墓が配されていることが知られる。おそらくこの墓地が形成され始めた初期には、中央の最高所には何か墓地のシンボルになるようなものが置かれ、そのまわりで火葬が行われ、火葬施設に接して火葬墓が営まれたものであろう。そして一五世紀以降になって土葬をはじめると、埋葬は火葬墓群のさらに外周りと、墓地として利用されていなかった中央の最高所にも及んだものと考えて大過なからう。

なお外部表象としての石塔と下部の埋葬との関係では、土葬墓には木棺の腐朽にもなつて上部の石組の石材とともに五輪塔の一部が陥没していたものが少なからずみられ、また石組中から石仏が検出されたものもある。このことから土葬墓には五輪塔あるいは石仏をともなったものが多いことは確実であるが、一方火葬施設の上の石組中から五輪塔の一部が出土した例もあり、五輪塔が火葬施設や火葬墓にも用いられたことはまちがいないからう。なお、土葬墓の上部の石組や石塔が棺の腐朽にともなつて陥没していたことは、石塔の造立の時期が埋葬とさほど隔たりのない時期であったこと、さらに埋葬後の墓地の管理が必ずしも行き届いたものではなかった

ことを示すものとして興味深い。

(二) 榛原町大王山東尾根中世墓地

榛原町下井足^{しもいだに}の通称大王山に位置した中世墓地で、町立大王小学校の建設に先立って一九七三年に発掘調査が奈良県立橿原考古学研究所によって行われた。⁽⁶⁾その位置は近鉄榛原駅の西南方約一キロ、宇陀川と芳野川の合流点のすぐ上手の南から北へのびる、平地との比高二〇メートルあまりの低い尾根上に立地していた。同じ尾根上には、中世墓地と重複

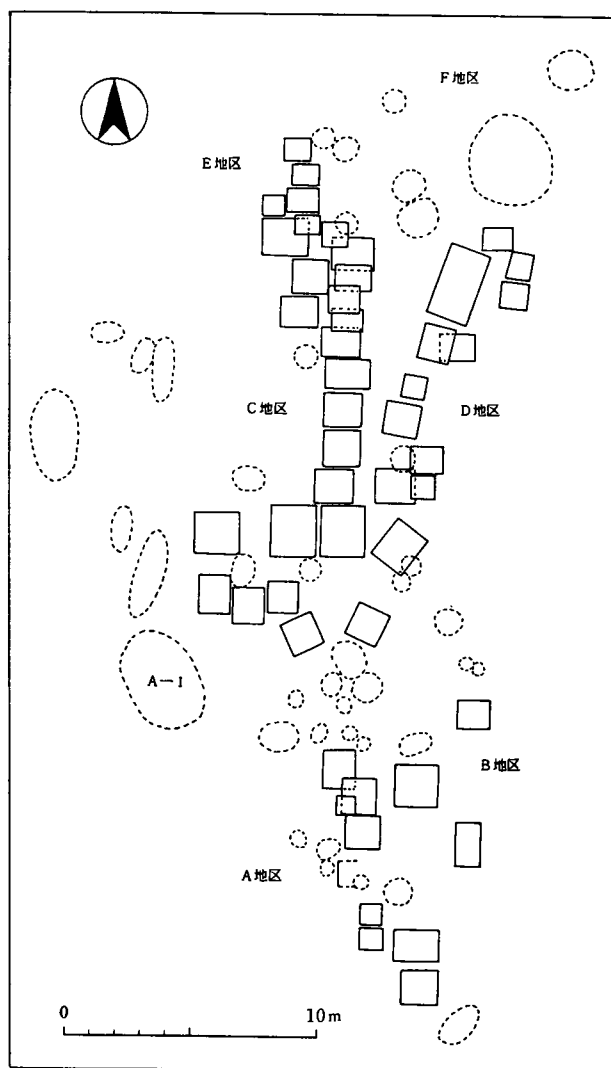


図6 榛原町大王山東尾根中世墓地 地上施設の配置図

して径一〇メートルほどの五世紀の古墳がある。また墓地のすぐ北に接して弥生時代終末期の長辺二〇メートル、短辺一五メートル、高さ一メートルほどの方形台状墓があり、さらに尾根の南方、墓地から鞍部を介した高所は明治初期まで存続した大王寺の跡である。

中世墓地は、尾根の頂部の平坦面から一部西側の斜面にかけての東西二〇メートルほどの幅で、長さ南北四〇メートルに及ぶ範囲に営まれていた(図6)。総数九〇基ほどの墓が確認されているが、それらの大部分は地上に、小規模なもので一辺〇・七メートルから大規模なもので一辺一・七メートルほどの方形の範囲に石を敷きつめた施設をもつ。これらの方形の石組は、尾根上の墓道と想定される空間において左右に整然と並んで配されており、よく整備された墓地景観が復元できる。また付近で五輪塔、箱形石仏、宝篋印塔など多数の石塔類が出土しており、墓の多くは本来石組の上に五輪塔、箱形石仏、宝篋印塔などの石塔類が建てられていたものと思われる。調査者は、一部に埋葬をともなわない供養塔として造立された石塔の存在を指摘しているが、二次的な移動をも考慮すると、本来的には地下の埋葬に対応して立てられたものと考えるべきであろう。五輪塔は組合せタイプのもので、最も数多くのこっている空風輪が二五個あり、さらに四方に複弁の蓮弁を彫った台座が二九個発見されている。石塔の大半が残っていたとすれば、三基に一基が五輪塔を持っていたことになるが、転用の容易な地輪などは八個しか残存せず、相当数は持ち去られたことが明らかであり、実際には墓の大半は五輪塔をともなっていたと考えるべきであろう。箱形石仏は本体は二個体出土

しているにすぎないが、その屋蓋は一個あり、五輪塔三に対し一の割合で用いられていたことになる。宝篋印塔は破片が二点みられるにすぎない。

この大王山東尾根中世墓地で調査された墓の地下施設はそのほとんどが火葬墓で、土葬墓と想定されるものは西斜面中腹で検出された長さ一・七五センチ、幅〇・九五センチの土壙(C一〇号墓)一基にすぎない。また谷畑中世墓で検出されたような明確な火葬施設もみられない。火葬墓には、須恵器、瀬戸、信楽、常滑、土師器羽釜、土師器鍋、瓦質土器などのやきものを蔵骨器に用いたもののほか、蔵骨容器が遺存しないところから有機質の蔵骨器を用いたと推定されるものも少なくない。副葬遺物はほとんどみられないが、墓の内部や石組の付近から相当量の土師器皿と小量の瓦器碗などがみつまっている。

出土した蔵骨器には、一二世紀末ないし一三世紀初頭の常滑長頸瓶⁽⁷⁾、一三世紀前半の中葉及び一四世紀前半の瀬戸四耳壺、一四世紀の信楽壺三、一五世紀後半の瀬戸鉄釉四耳壺、さらに一五世紀前後の土師器羽釜、土師器鍋、土師器壺などがみられる。また土師器の皿にも一三〜一六世紀の各時期のものが、瓦器碗には一四世紀のものがあ

る。一方五輪塔も谷畑墓地同様一五世紀から一六世紀前半ころのものが多くと思われるが、なかには後述する大宇陀町大蔵寺墓地の正平六年(一三五二)銘の五輪塔に近い型式の特徴をもち、一四世紀に遡る可能性のあるものもみられる。また一六世紀後半に中心があると考えられる箱形石仏も少なからずみられることは先に述べたとおりである。これらの資

料から、大王山東尾根墓地は一三世紀ころから始まり、一六世紀後半まではほぼ断絶なく使用された墓地と考えられよう。もちろんここでも一三・一四世紀に比し一五・一六世紀に墓地の利用が活発化することは確かであろう。なお一基だけみられる土葬墓は、土壌内から出土している土師器の小皿が、口縁の立ち上がりが比較的急な特徴をもつもので、一二世紀に遡る可能性が大きい⁽⁸⁾。

このように大王山東尾根墓地は、一三世紀頃から一六世紀に及ぶ墓地で、谷畑墓地とは異なり基本的には火葬墓のみで構成されている。顕著な火葬施設がみられないこと、墓地の下限が箱形石仏の存在から一六世紀後半にまで及ぶにもかかわらず横臥屈葬の土葬墓がみられないことは注意すべきであろう。また谷畑墓地に比べて地上の石組にも大きいものも多く、さらに五輪塔は谷畑例よりひとまわり大きい復元高八〇センチ前後(台座を含まない)のものもみられ、谷畑ではまったくみられなかった台座をもつものが一般的である。このことは、墓地を営んだ集団が階層的に高い位置にあったことを示すものと理解して差支えなからう。

なお、大王山東尾根から谷をはさんで一〇〇メートル西側の尾根上には径一三・五メートルの五世紀後半の円墳が、さらにその北にはやはり五世紀後半の墳丘長二六メートルの南に前方部を配した小前方後円墳がある。この円墳の北側の周溝部分から七基の円形土壌が検出されており、うち一基から青白磁の合子が出土し、周溝の外側からも三基の小土壌がみつかり、付近から一〇世紀頃の土師器皿⁽⁹⁾が出ている。また円墳の南側からは地上に石組をもつ方形の土壌四基が検出されており、うち一基か

らは八稜鏡が人骨の一部とともに検出されている。いずれも平安時代の土葬墓と考えられる。また前方後円墳の前方部前面の周溝内から八稜鏡や鉄製紡錘車が一〇世紀頃の土師器皿などと共に出土しているが、これも同時期の墓であろう。このように大王山の西尾根上の古墳の周囲には一〇世紀から一二世紀頃にかけての墓が一〇数基検出されており、いずれも伸展葬ではない土葬の土壌墓であることが注意される。

(三) 榛原町能峠南山中世墓地

前記大王山東尾根中世墓地より芳野川を隔てて東南方約一キロの、榛原町上井足^{かみいど}に位置し、大和高原農地開拓事業にともない一九八二年に奈良県立橿原考古学研究所によって発掘調査が行われた⁽¹⁰⁾。調査の際に南山と名付けられた丘陵は比高五〇メートルほどの独立丘陵で、丘陵の主脈上から北へのびる尾根上には弥生時代終末期から古墳時代前期の台状墓が、主脈上からその南斜面には古墳時代後期の古墳が数多く営まれている。中世墓地は北へのびる尾根上に、一部台状墓と重複して営まれている。その範囲は南北二五メートルの長さにわたり、幅は一二メートルほどである(図7)。

発掘調査で確認された中世墓地関係の遺構は二三基で、うち一二基は火葬骨を収納した火葬墓、七基は火葬施設、四基は土葬墓である。外部施設としての石組遺構の依存状況は悪く、わずかに火葬墓一、火葬施設一に認められたにすぎないが、他に地下に遺構が発見されていない石組が四個所ほどあった。石塔類には、五輪塔と箱形石仏の屋蓋がある。五

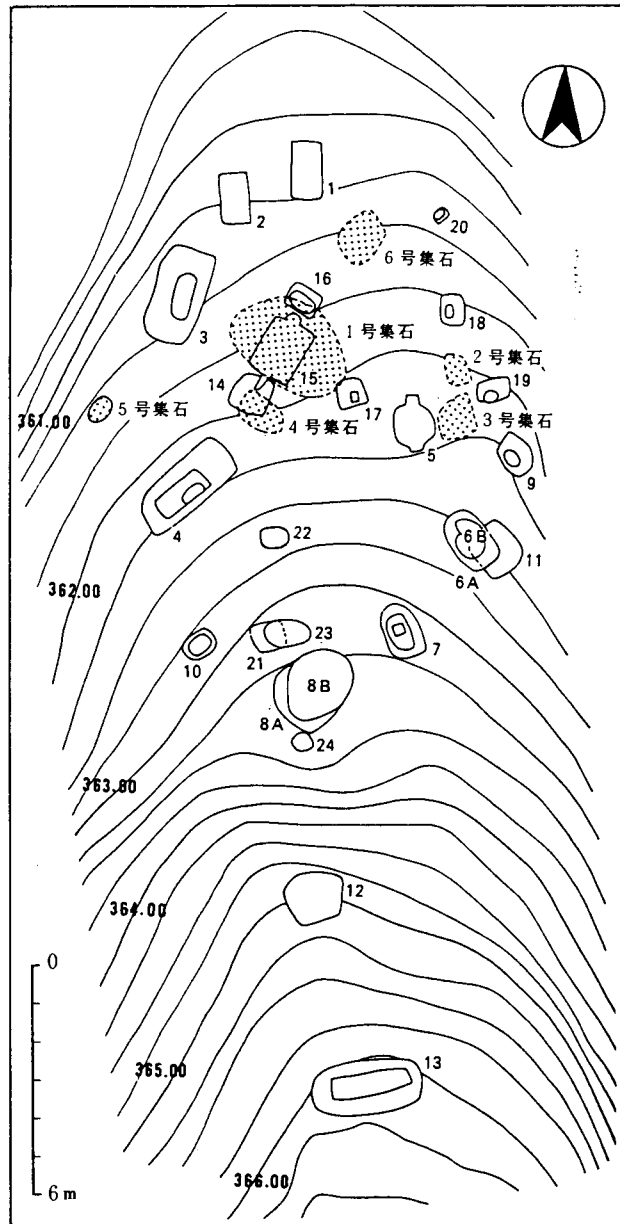


図7 榛原町能峠南山中世墓地の調査図

輪塔には空風輪二、火輪一、地輪三があり、地輪の一つには一側面に半肉彫の仏像の座像が彫られている。箱形石仏の屋蓋は一にすぎない。なお五輪塔の地輪三のうち二は火葬施設の土壌内から出土したもので棺台に転用されていた。

火葬骨を収納した火葬墓はいずれも方形ないし楕円形の土壌に火葬骨を納めたものであるが、やきものの蔵骨器をとまわず、火葬骨はすべて有機質の容器に納められていたものと推定されている。一方火葬施設には、谷畑中世墓にみられたような長方形の平面の土壌で底部に長軸の

葬土壌で火葬に付した遺骨を集骨して中央の小土壌に納めた可納性が想定されている。ただしこれ以外の火葬施設では特に集骨した火葬骨を埋納した状況は認められておらず、火葬施設とは別に火葬骨を埋納したと思われる。

土葬墓には、径六〇〜八五センチの円形土壌をもつもの、長径一・四メートルの長楕円形土壌をもつもの、長さ二・八五メートル、幅一・四メートルの長方形土壌をとまうものなどがある。円形土壌のものにはB号墓のように壮年男性の西向き座臥屈葬例があり、桶状の棺を用い

方向に墳外にまでのびる煙道をともなうものが一基みられるほかは長方形ないし楕円形の土壌である。後者のうち長方形の土壌の一基(二号墓)では、長さ二・七メートル、幅一・二メートルほどの大きな火葬土壌を埋めたあとその中央に長さ一メートル、幅五〇センチほどの土壌を穿ち、火葬骨と灰を納めていた。大きな火葬土壌の中央部に正確に重なっているから、この火

たものであろう。一方長楕円土壇の二三号墓からは若い女性の仰臥屈葬例が確認されている。このうち桶状棺を用いた考えられる八B号墓と六B号墓はともに火葬施設と重複しており、火葬施設より遅れるものであることが確実であり、さらに八B号墓では開元通宝、政和通宝など六枚の銭貨が人骨の胸元から出土している。こうしたいわゆる六文銭副葬の風習は近世に一般化するものであり、本例がこの墓地の存続期間の中でも新しい時期のものであることが知られる。また長楕円土壇で仰臥屈葬の二三号墓からは四枚の永楽通宝が出土しており、一五世紀以前にはさかのぼらない。なお、火葬墓の一号墓からも紐で結ばれ錆着した六文銭が出土している。

やきものの蔵骨器がまったく出土していないためにこの墓地の年代については不明なところが多いが、煙道付きの火葬施設は谷畑中世墓の調査結果からは一三〜一四世紀にさかのぼるものが多いと判断されること、土師器の皿の中には一四世紀にさかのぼると考えられるもの（一〇号墓出土品⁽¹⁾）などがあり、墓地の始まりが一四世紀にさかのぼることはまず確実であろう。下限については、箱形石仏の存在から一六世紀後半に及ぶものであることは確かであろう。

このように能峠南山中世墓地は、火葬施設、火葬墓、土葬墓からなる点で谷畑中世墓地に近いが、火葬施設を即火葬墓とするのがみられないところが異なる⁽¹²⁾。なお造墓の開始は谷畑例よりやや遅れるかも知れないが、一四世紀には火葬施設、火葬墓として始まっているものと考えておきたい。下限については六文銭をとまなうものがみられるところから谷

畑墓地よりやや下がるかとも思われるが、石塔に光背五輪塔（尖頭状五輪板碑）など近世初期のものがまったくみられないところからも一七世紀には降らないと考えられる。

なおこの能峠南山の主脈上には、平安時代の初期のものかと推定される木櫃墓五基が、また主脈の頂上部に近い北東斜面には平安中期ころのものかと推定される方形土壇が六基ほど検出されている。さらに主脈上に立地する後期古墳の一号墳の横穴式石室は、平安時代前期に木棺をとまなう埋葬が羨道部に行われ、さらに一二世紀には天井石がとり除かれ火葬場として再利用されている。また三号墳の横穴式石室も平安時代前期に木棺をとまなう埋葬に再利用されている。

四 榛原町野山北斜面中世墓地

この野山中世墓地は、前記の能峠南山中世墓地の所在する上井足からさらに芳野川を南に三キロほどさかのぼった、芳野川東岸の榛原町沢に位置するもので、やはり大和高原農地開拓事業にもなっており、一九八五年に奈良県立橿原考古学研究所により発掘調査が行われたものである⁽¹³⁾。

墓地は野山という小字名をもつ丘陵の西南斜面に長さ約一五メートル、幅五〜二メートルの平坦地を造成して営まれている（図8）。

総数三四基の墓が検出されており、ほとんどは地上に方形ないし不整形の石組をとまなう。そのうち大きなものは長さ二メートル、幅一・八メートルの規模をもつ。さらにそのうちのいくつかは石組の上に五輪塔ないし箱形の石仏をとまなっていた。遺存していた五輪塔は、空風輪五、

火輪五、水輪二、地輪七である。一方、箱形石仏の屋蓋が二個ある。なおST三号墓では一つの石組に二基の五輪塔が並べて造立されていたらしく、地輪二が並んで発見されている。

これらの石組の下に営まれた墓のうち構造の明らかなものはすべて火葬墓と考えられる。墓地の最も西寄りで見出された須恵器の瓶を蔵骨器の外容器として利用していたST三〇号墓以外はやきものの蔵骨器を使用しておらず、すべて有機質の容器を用いたらしい。

この須恵器瓶は一二世紀中葉～後半の魚住焼と考えられ、また石組の付近から出土している土師器皿にも一三世紀後半にさかのぼると考えられるもの⁽¹⁴⁾がみられる。したがって墓地の上限は一三世紀にさかのぼるものと思われる。一方その下限については、箱形の石仏がともなうものがあるところから一六世紀に及ぶものであることが考えられる。野山北斜面の中世墓地は、谷畑例と同様一三世紀から一六世紀に及ぶものと想定されるが、土葬墓や火葬施設をまったく含まない点でむしろ大王山東尾根中世墓地と共通するところが大きい。ただ大王山例のように台座をもつ五輪塔はみられず、その規模も小型である。

なおこの野山の丘陵上にも点々と中世墓が散在的に営まれている。そのうちST〇一、ST〇二はともに長さ三メートルあまりの長細い楕円形の土壇の底部に煙道の溝を設けた火葬施設で、層位的に前者が埋められてのち後者が営まれたと想定されており、隣接するところからも相次いで使用されたものであろう。ST〇二から瓦器の細片が出土しており、中世前半のものと考えられる。このほか丘陵上の五基の墓はいずれも土

葬墓で、特にST〇三は地上に一边二メートルの方形の石組をもち、その地下の一・八五×一・三メートルの土壇内から側臥屈葬の壮年男性の人骨が見出されている。一四世紀ころの青磁碗と短刀が出土している。またST〇四は副葬された瓦器碗から一四世紀はじめ、ST〇五は時絵の蓋物から一三世紀前半、ST〇七は瓦器碗から一三世紀後半の土葬墓であることが知られる。

このように野山では一三・一四世紀には丘陵上に火葬施設と土葬墓が、北斜面では火葬墓が同時期に並行して営まれていたことになる。この場合丘陵上の土葬墓には副葬遺物が認められる点でより上位の被葬者層を想定してあやまりないものと思われる。

(四) 榛原町シメン坂中世墓地

シメン坂中世墓地は榛原町沢にあり、前記野山北斜面中世墓地の西南約二〇〇メートルのところ、北へのびる丘陵の尾根上に立地する。大和高原農地開拓事業にともない一九八五年に発掘調査が奈良県立橿原考古学研究所によって行われ、尾根の先端に近い長さ二五メートル、幅一〇メートルの範囲から総数四八基の中世墓が見出されている⁽¹⁵⁾。

すでにみた諸例と同様、地上には石を敷き詰めた方形ないし円形の石組があり、さらに五輪塔、箱形石仏などの石塔類がともなっていたと思われる。五輪塔には組合せ式のもの以外に一石五輪塔が一基みられる。組合せ式のものは空風輪が二七、火輪が一〇、水輪が一七あるが、地輪はわずかに二点ほどで極端に少なく、方形で転用しやすいところから持



図8 榛原町野山北斜面中世墓地調査図

ち去られたものと思われる。他に台座が四点ほどみついている。石仏には屋蓋をとまなう箱形のが三、屋蓋が三あり、ほかに下端を埋め込むタイプで尖頭形のもの一、同じく上端が平坦なものが一つある。いずれも地蔵と考えられている。

一方、地下遺構には火葬骨を納めた火葬墓が二六、火葬施設が六あり、土葬墓は不確定なものを含めても五例にすぎない。火葬墓でやきものの蔵骨器をとまなうものは四基にすぎず、常滑大瓶一、土師器羽釜二、瓦質土器の火鉢一である。その他はいずれも有機質の蔵骨器を用いたものである。火葬施設は長方形の土壇の底部に煙道の溝を設けたものが多く、そのうちの一基(ST三〇)は火葬骨を詰めた土師器鍋が煙道の溝内に納められており、火葬施設であるとともに火葬墓であることが知られる。土葬墓には、一・四メートル程度の平面をもつ方形土壇と一・二×〇・九メートル程度の楕円形平面の土壇がある。前者は側臥屈葬の箱形棺、後者は桶状の棺である可能性が大きいと思われる。

蔵骨器のうち常滑の大瓶は一三世紀後半のものであり、土師器の羽釜二点はいずれも一五世紀、瓦質土器の火鉢は一五世紀のものと考えられる。また火葬施設から出土した土師器鍋は一四世紀後半と考えて大過なからう。さらに墓地の各所から出土している土師器皿には一三世紀ないし一四世紀にさかのぼるものがみられ、瓦器の碗、皿も一三世紀後半までさかのぼる。したがってこのシメン坂墓地の始まりが一三世紀後半までのぼることはまず確実であろう。一方その下限が一六世紀まで下がることは、箱形石仏の存在からも疑いなからう。このようにシメン坂墓地

は一三世紀にはじまる墓地で一六世紀まで存続するが、基本的には火葬墓地であり、その存続期間の最終段階に土葬が開始されているものと思われる。

なお、このシメン坂墓地より三〇メートルほど南西の尾根の高地では近世の墓地が調査されている(図10)。一九基ほど検出されているがいずれも径一メートル前後の円形ないし方形の土壇が多く、一九基のうち一八基から座位屈葬の人骨が検出されている。多くは桶状の棺であったと思われる。土壇には切り合いの認められるものが少なくまた石塔類もまったくみられない。副葬品としては灯明皿としての用途をもつ土師器の皿以外には一号墓で寛永通宝が四枚遺骸の胸元で出土しているにすぎない。調査者は土師器皿の年代から一七から一八世紀にかけて営まれたと考えている。シメン坂中世墓地にも座位屈葬の円形土壇が少数認められているからシメン坂中世墓地からこの近世墓につながるものである可能性が大きい。なお石塔類がまったくみられず、また土壇の切り合いが著しいことなどは、あるいはこれが両墓制の埋め墓であった可能性が大きいことを示すものではなからうか。

シメン坂中世墓地の東、近世墓の北側の谷間の平坦地が「シメンジ」とよばれ、五輪塔の石材を転用して敷詰めた遺構や土師器、瓦器などの土器それに箱形石仏や一石五輪塔なども出土している。おそらく「シメン寺」とよばれた寺院の跡であろう(図10)。瓦器などいづれも一三世紀以降のものであり、シメン坂中世墓地の始まりとほぼ同じ頃に建てられたものであろう。この寺院がシメン坂墓地と密接な関係を持って出現し

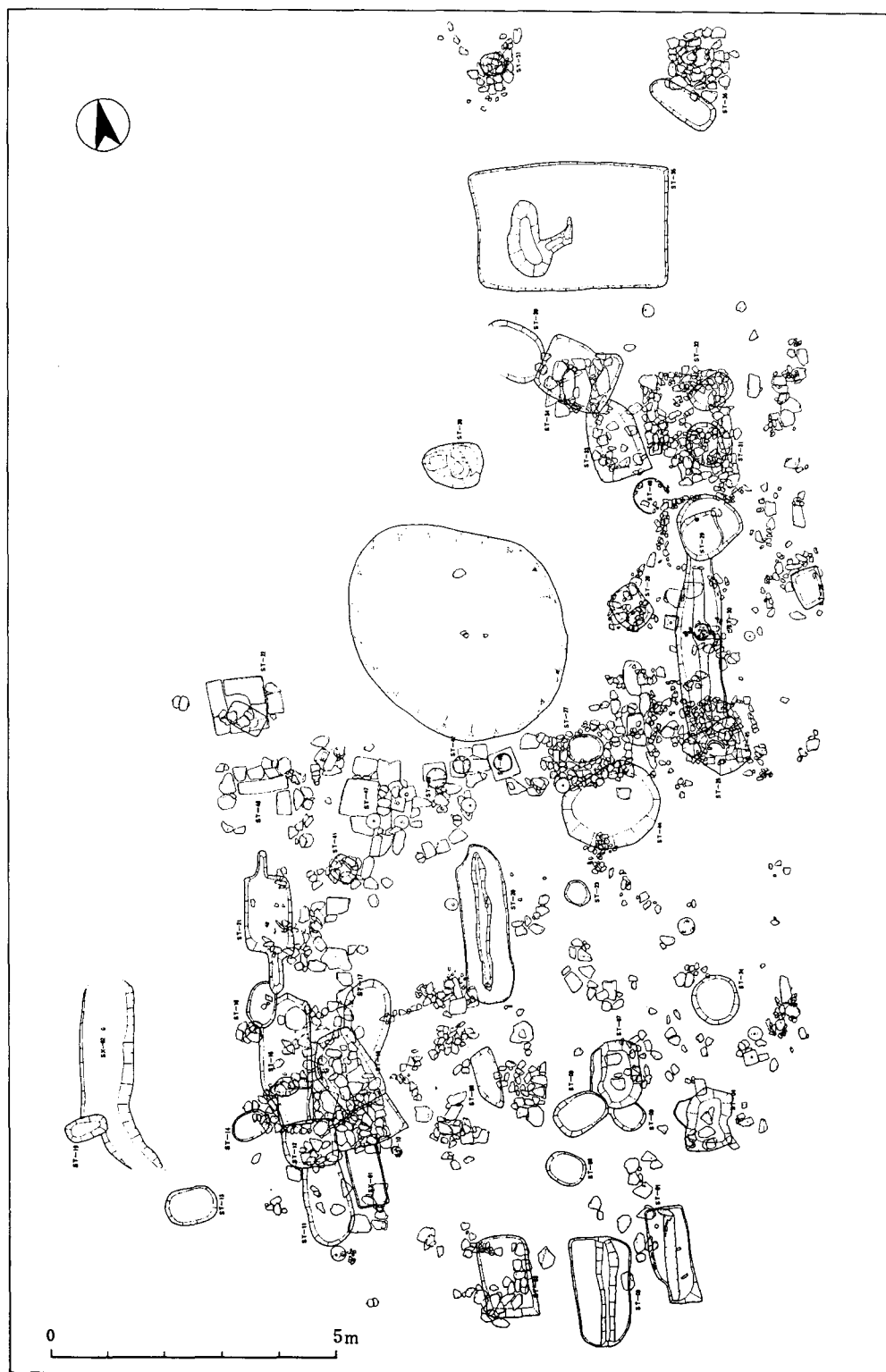


図9 榛原町シメン坂中世墓地調査図

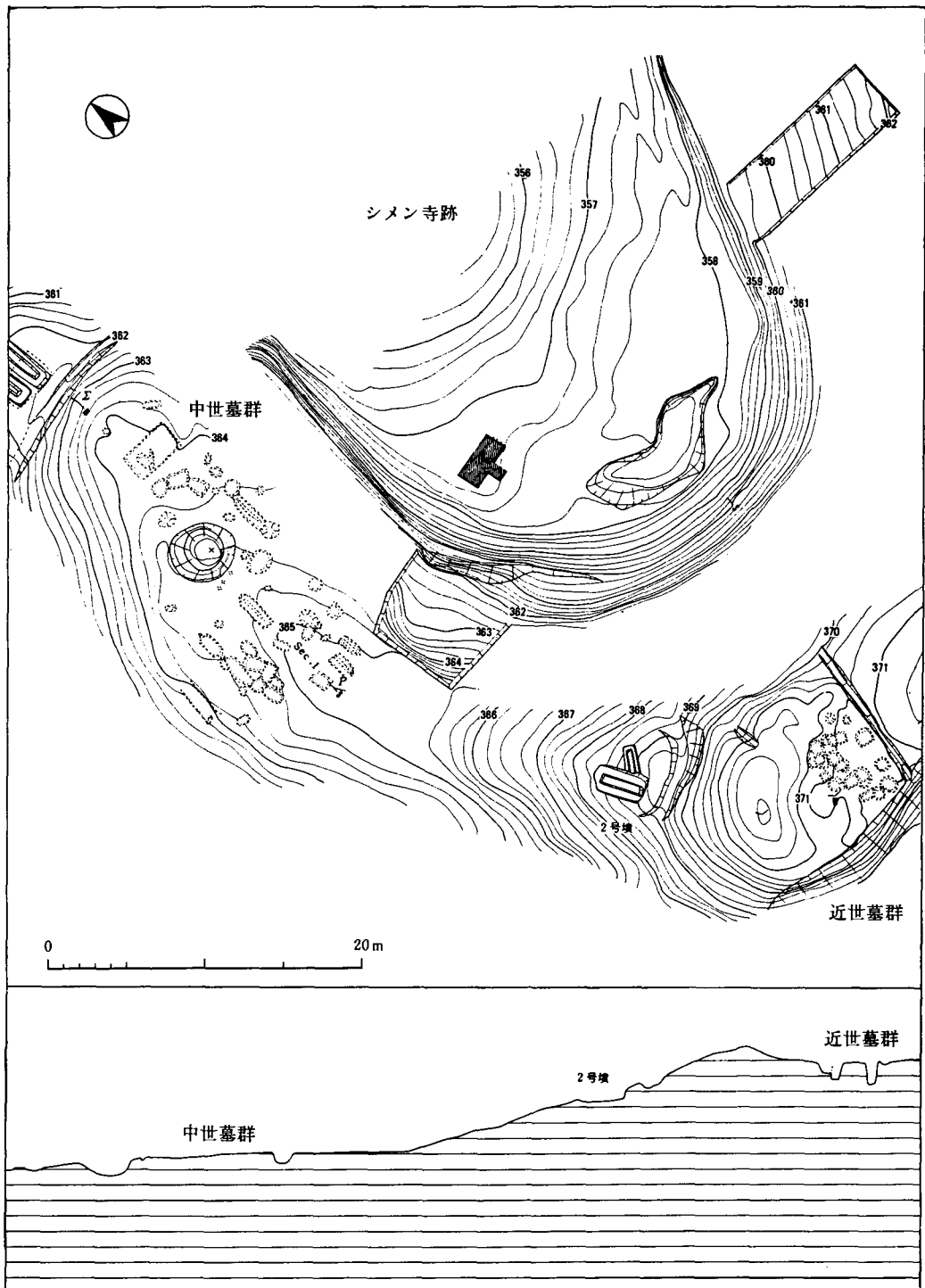


図10 榛原町シメン坂の中世墓地・近世墓地とシメン寺跡

たものと考えて差支えなからう。

(六) 大宇陀町チクマ中世墓地

チクマ中世墓地は、大宇陀町岩清水に所在するもので、大和高原農地開拓事業にともなって、一九七九年に奈良県立橿原考古学研究所によって発掘調査が行われた。⁽¹⁶⁾ 岩清水は東の芳野川と西の宇陀川の間を北流する芳野川の支流母里川の流域にあり、墓地は岩清水の集落に北に広がる山丘の最高所より北東に延びる尾根の最高所に位置する。中世墓はこの尾根の最高長さ三五メートル、幅一五メートルほどの範囲に五〇個所ほど確認されている(図11)。

調査者は、尾根筋の西よりの最高所の東西一四メートル、東西九メートルほどの範囲を第一区、その東の東西に長い長方形の石囲いにかこまれた範囲を第二区、第一区から南西へ延びる尾根上の第三区、第二区の南東に展開する一群を第四区に区分している。いずれも地上に方形の石組遺構をもち、その二割弱が五輪塔、石仏をともなっていたと想定されている。外部施設で特に注目されるのは、第二区の八基ほどの墓が東西八メートル、南北三メートルの範囲にわたり石列で囲まれ、特定の区画を構成していることであろう。

地下遺構は、第一区では一三基のうち一基が火葬施設に火葬骨を収納したもの、二基が火葬骨を納めた火葬墓で、それ以外はすべて土葬の方形土壇である。東側の第二区では火葬施設であり、かつ火葬骨を収納したものが三基、火葬骨を納めた火葬墓が四基、さらに土葬の可能性のあ

る土壇が一基ある。このほか第三区では二基の火葬施設、火葬墓以外の七基は土葬墓であり、第四区では六基すべてが土葬墓であった。全体では火葬施設でかつ火葬骨を収納したものが六、火葬骨を収納した火葬墓が六、不確実なものを含むが土葬墓が二五ということになる。土葬墓は側臥屈葬が基本であったと思われる。火葬墓の蔵骨器としては、第二区の火葬墓が一四世紀にさかのぼる土師器の鍋をもつ他はやきものの骨壺はみられず、すべて有機質の蔵骨器であったと想定されている。

墓地の形成過程について調査を担当された泉森皎氏は、主として各墓の立地などから最高所の第一区の土葬墓を初期のものとし、次いで第二区に火葬施設が設けられそこで火葬に付された遺骨が第一区に火葬墓に納められ、やがて二区にも火葬墓が営まれ、方形の区画が設定される。

その後第三区に墓域は拡張され火葬からまた土葬に転換し、さらに第四区にも土葬墓が営まれたと考えておられる。しかしながら泉森氏が初期のものと考えられた第一区の中央の八号墓は明らかに五輪塔がともなっていて一五世紀に降る可能性が大きいのに対し、第二区に火葬墓四七号墓の蔵骨器の土師器鍋は一四世紀にさかのぼるものと考えられ、同じく第二区に火葬施設二〇号墓出土の土師器皿も一四世紀の瓦器碗をともなっている田原本町法貴寺遺跡溝三や溝一の資料に近い。⁽¹⁷⁾ さらに二区には一区に多い小五輪塔などの石塔の造立がまったく認められないことから、この墓地はまず第二区に火葬施設や火葬墓から始まった可能性が大きいと思われる。石仏をともなう四三号墓のある第三区や二七号墓のある第四区に土葬墓がこの墓地の最終段階のものであることは泉森氏の

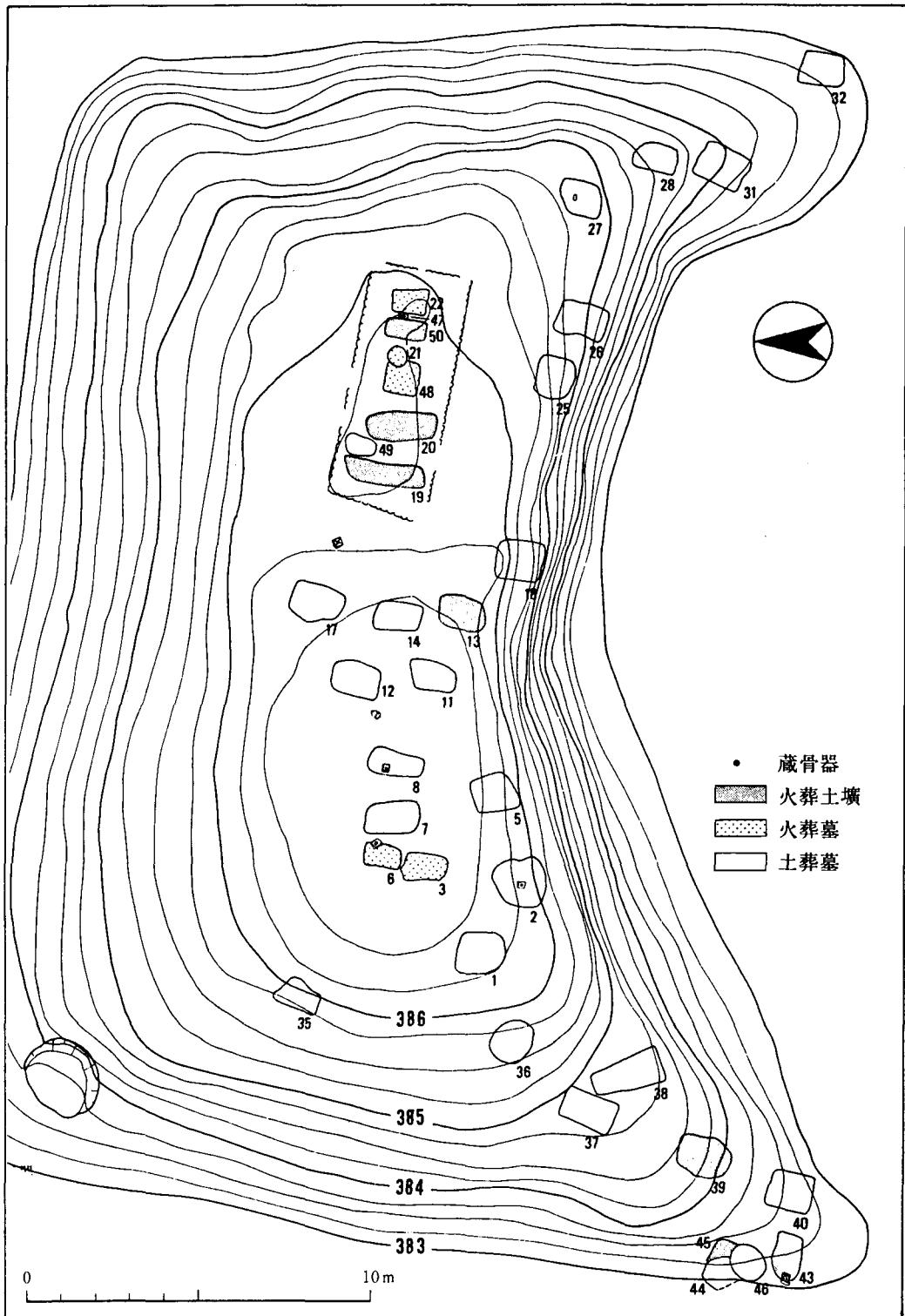


図11 大宇陀町ナクマ中世墓地調査図

指摘のとおりであろう。

このようにチクマ墓地は、一四世紀にまず火葬墓として第二区から始まり、一五世紀になって土葬が多くなると第一区にも造墓が行われるようになり、一六世紀には第三区や第四区にもおよんだものといえよう。

第二区の長方形区画の石囲いは、この一族の祖先の墓として特別な扱いがなされたものであろう。その意味では、この区画内にこの墓地のシンボリックな大型の石塔などが建てられていた可能性も考えるべきかも知れない。

註

- (1) 白石太郎・田坂正昭「榛原町谷畑中世墓地の調査」(『青陵』二四号、一九七四年)。
- (2) 瓦質土器鍋の年代については、菅原正昭「畿内における中世土器の生産と流通」(『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』一九八三年) などによる。
- (3) 土師器の羽釜、鍋などの年代については、伊藤久嗣「元興寺極楽坊出土の羽釜形土器」(『元興寺仏教民俗資料研究所年報』第一冊、一九六七年)、森下恵介ほか「古市城跡」(『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和五五年度、一九八一年) などによる。
- (4) 火葬施設出土の土師器皿には、田原本町十六面・薬王寺遺跡や同法貴寺遺跡で湯呑形の瓦器碗と共存する一四世紀代のものが多いが、十六面・薬王寺遺跡南Ⅱ調査区SK〇一出土例など一三世紀代の瓦器碗と共存する小皿に近いものがあり、一部一三世紀代にさかのぼるものが含まれているようである。松本洋明「十六面・薬王寺」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第五四集 一九八八年』、今尾文昭・田中一広「田原本町法貴寺遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』一九八六年度、一九八七年)。
- (5) 森下恵介ほか「古市城跡発掘調査報告」(『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和五五年度、一九八一年)。
- (6) 伊藤勇輔ほか「奈良県宇陀郡大王山遺跡」(榛原町教育委員会、一九七七

年)。

- (7) 報告書では平安時代後期の須恵器とされているもの(D二墓出土)。頸部と胴部の境に一段の凸帯をめぐらしたもので、広口瓶と水瓶の中間的な形態を呈する。
- (8) 桜井市纏向遺跡東田地区の井戸六Aの資料に近いと判断され、近江俊秀氏のいう纏向東田五期にあたらう。近江俊秀「纏向遺跡出土中世土器の再検討」(『大和の中世土器』大和古中近研究会研究資料一、一九九一年)。
- (9) 天禄四年(九七三)に焼失した薬師寺西僧房の大房床面出土の資料に近い。奈良国立文化財研究所「薬師寺発掘調査報告」(奈良国立文化財研究所学報第四五冊、一九八七年)。
- (10) 楠元哲夫編「能峠遺跡群」―南山編(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第四八冊、一九八六年)。
- (11) 一四世紀代の瓦器碗をとまなう田原本町十六面・薬王寺遺跡北Ⅰ調査区の溝SD一二出土の土師器皿に近いものがみられる。松本洋明「十六面・薬王寺遺跡」(前掲)。
- (12) 調査を担当された楠元哲夫氏はこれらの火葬施設のうち墳内に人骨や灰をはとんどのこさない一五号墓以外の火葬施設はそのままで火葬墓であったと考えておられる。しかし火葬墓にはすでに奈良時代から火葬場所に集骨した火葬骨を納めたものと火葬場所とは別の場所に火葬骨を納めたものの二者があることが知られている。前者の火葬施設と後者の火葬施設は区別して扱うべきであり、その場合火葬骨片の残存ではなく、骨拾いにともなう集骨の有無を重視すべきであらう。中世の皇族・貴族墓では火葬墓と単なる火葬塚を区別している。したがって筆者は一五号墓以外の火葬施設についても集骨とその埋納が認められないところから火葬墓とは考えない。楠元哲夫「中世後半期における集団墓地」とくにその生成と展開をめぐる―(『末永先生米寿記念献呈論文集』坤 一九八五年)。
- (13) 井上義光ほか「野山遺跡群」―(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第五六冊、一九八八年)。
- (14) 一三世紀後半ないし末葉の瓦器碗をとまなう橿原市東竹田遺跡の溝SD一W上層出土の土師器皿に近いものが見られる。入倉徳裕・近江俊秀「東竹田遺跡」(『大和の中世土器』瓦器碗土師皿を中心として)―大和古中近研究会研究資料一、一九九一年)。

(15) 井上義光『野山遺跡群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第五

九冊、一九八九年)。

(16) 泉森皎「宇陀地方の遺跡調査―大宇陀町岩清水・塚脇遺跡―」(『奈良県遺跡調査概報』一九七八年度 第二分冊 一九八一年)。

(17) 今尾文昭・田中一広「法貴寺遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』一九八六年度 一九八九年)。

一 発掘された中世墓地の性格

前節では、最近の発掘調査により墓地のほぼ全容が明らかにされている宇陀地方の六例についてその概要を整理するとともに、その年代や形成過程について若干の検討を加えてみた。その結果特に注目されるのは、これらたまたま開発に先立って発掘されたこの地域の中世墓地が、いくつかのきわめて強い共通点を持っていることであろう。

まず立地については、丘陵斜面にテラスを造成して墓地を営んでいる野山北斜面の墓地以外はいずれも丘陵上の頂上部ないし脊梁部を利用して営まれている。これはのちに述べるこの地域に現存する中世以来の墓地についても共通しているところであり、それはある意味では弥生時代終末期ないし古墳時代初期の台状墓や古墳時代の古墳とも共通するものといえる。中世墓地が台状墓や古墳と重複している場合が少なくないこと、その場合も台状墓や古墳の存在を意識し、古墳を避けその周辺に中世墓地を営んでいる例のあることは興味深い。その地域の草分けとして、はるか昔の祖先に対する意識が存在したのかも知れない。少なくとも

も中世に始まる新しい墓地の選地に際し、宇陀地方では古墳の立地と共通する尾根上がえらばれた理由の一端はこうしたところにあるのではないだろうか。

この地域の中世墓地の大きな特色は、それらの墓地を構成する個々の墓がいずれも地上に顕著な石組の外部表象をもっていることであろう。遺跡によってその遺存程度には差があるが、本来ほとんどの墓が地上に石組をもっていたことは、先にみたところからも明らかである。さらにそれらの石組の上に組合せ式の五輪塔や箱形の石仏がともなっていたと考えられるものも少なくない。シメン坂墓地では四八基の墓に対し少なくとも五輪塔が二七基はあったことが空風輪の遺存から明らかであり、転用などを考えると他の墓地でも遺存したものよりはるかに多くの石塔がともなっていたのであろう。小型の五輪塔の造立が盛んになるのは一五世紀後半からと考えられるから、少なくともこの時期以降の墓はほとんど石塔類を持っていたと考えないと数が合わなくなる。なお一五世紀前半以前については、のちに述べるように、現在まで続く中世以来の墓地の中央に南北朝にさかのぼる大型の五輪塔をもつものがあるところから、個々の墓ではなく、墓地全体のシンボルとしての大型の石塔が造立されていた可能性が大きいと思われる。

地下の構造については、やや墓地ごとの違いが顕著のようにみえるが、実際にはあまり大きな差異はないと思われる。確かに土葬墓が圧倒的に多いチクマ墓地(火葬墓六、火葬施設六、土葬墓二五)や火葬墓が多いが土葬墓も少なくない谷畑墓地(火葬墓三〇、火葬施設一〇、土葬墓一

七) に対して能峠南山墓地(火葬墓一二、火葬施設七、土葬墓四)やシメン坂墓地(火葬墓二六、火葬施設六、土葬墓五)では火葬墓が圧倒的に多くなる。さらに大王山墓地や野山墓地のように基本的には火葬墓のみで構成される墓地もみられる。しかしいずれの墓地でも火葬から土葬墓への変化の方向は一致しており、こうした火葬墓と土葬墓の割合の差は、土葬への転換の時期の差にはかならないと思われる。たとえばシメン坂墓地に土葬墓が多いのはこの墓地では他に比べてやや早くから土葬が採用されたこと、さらに墓地の始まりが他に比べてやや遅かったためであろう。逆に大王山墓地では土葬の採用が遅く、最終段階まで火葬が存続したのであろう。

さらにそうした土葬の採用時期の差といった個々の違いを越えて、強い共通性が認められるのは、墓地自体の形成時期と廃絶時期の一致であろう。まずその形成時期については、この地域で中世墓地が盛んに営まれるのは室町時代に入ってからとする理解が一般的であったが、前節の検討からも明らかのように、谷畑、大王山、野山、シメン坂の四墓地はいずれも一三世紀に始まっていることは蔵骨器や祭祀に用いられた土師器皿あるいは瓦器の年代からも確実であろう。また能峠南山、チクマ墓地も一四世紀には造墓が始まっていることは疑いない。さらにこの両墓地についても一三世紀にさかのぼることを示す資料の遺存がみられないだけで、一三世紀代に始まっている可能性も否定できない。

一方その廃絶の時期については、これら六個所の墓地ではいずれも一六世紀後半を中心に造られた有蓋の箱形石仏が検出されており、また近

世に入って盛んに造られる光背五輪塔(尖頭状五輪板碑)や尖頭形の墓標がまったくみられないことは、その下限が一六世紀代にあることを示唆している⁽²⁾。なおチクマ墓地など石仏に箱形以外の尖頭形のものがないのもなう墓地はややその下限が下がるかも知れない。なおこれらの墓地では一三世紀代に始まっているとしても、一三・一四世紀のものは一五・一六世紀のものにくらべてその数が少ないと推定されるが、石塔類をともしなわな古い時期のものについては、やきものの蔵骨器をともしなわないかぎり年代決定は困難であり、予想以上に一三・一四世紀の火葬墓は多いかも知れない。このほか、谷畑墓地の北方の西峠中世墓地では一三世紀にさかのぼる白磁の四耳壺の蔵骨器が出土している(図12)⁽³⁾。この墓地も五輪塔や箱形の石仏をともしなう中世墓地であり、その上限が一三世

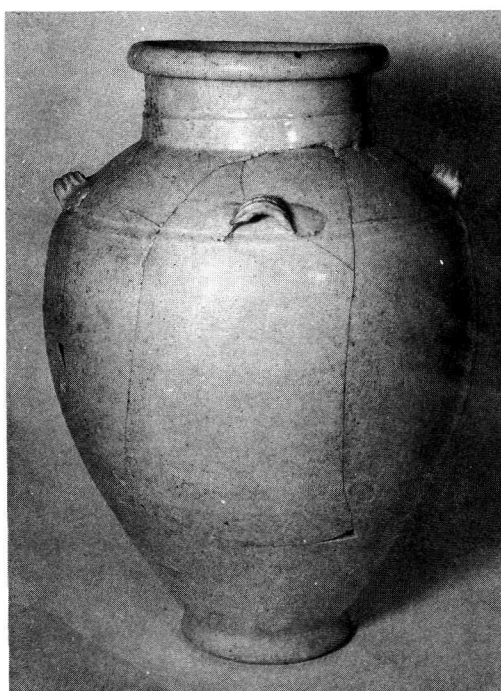


図12 榛原町西峠中世墓地出土の白磁四耳壺

紀にさかのぼることを物語っている。

宇陀地方でたまたま発掘調査が行われた六個所の墓地が、立地、地上の外部施設、地下の構造、墓地の形成時期・廃絶時期などについてきわめて強い共通性が認められるということは、これらの墓地をこの地域の中世の一般的な墓地を代表するものとして大過ないことを示すものといえよう。なおこうした大きな共通性を持ちながらも、その一方でそれぞれの墓地により顕著な差異が存在することもまた重要であろう。まず地上の外部表象については、大王山のように五輪塔がいずれも台座をもとなうのに対し、シメン坂では台座をもつものがわずかにみられるにすぎず、他の墓地ではこれがまったくみられない。墓地によってほとんどの五輪塔が台座をとまなうところと、台座がまったく用いられないところが存在するのである。一方火葬骨の蔵骨器についても、大王山や谷畑のようにやきものの蔵骨器が比較的豊富に用いられているところと、能峠南山や野山墓地のようにほとんどやきものの骨壺をとまなわなるところもある。また西坪墓地では輸入磁器の白磁四耳壺がみられることも注意されよう。これらは墓地を形成した集団の階層差や経済力の違いを反映するものとして差支えなからう。

それではこのように一三世紀ころから宇陀地方の各地に出現する、一定の階層差を内包しながらも強い共通性を示して営まれる中世墓地は、いかなる被葬者層がどのような紐帯で共同の墓地を形成したものであろうか。これら六個所の墓地の規模は大王山の九〇基から能峠南山の二三基までさまざまである。大王山墓地についてはこれを家単位や垣内単位

とは考えられないとし、数村をまとめた小郷墓ないし郷墓ととらえる考えがある⁽⁴⁾。また郷墓ととらえないまでも「武士団・富裕農民層の地縁的紐帯で結ばれた墓地」とする見解もある⁽⁵⁾。九〇基といえは多いようであるが、一三世紀から一六世紀という四〇〇年にわたる長い存続期間を考慮すると、それ程多い数ではない。いま仮に世代の交替が二〇年毎に行われたとすると四〇〇年間には二〇世代が交替することになる。とすれば九〇基といっても各世代ごとではこの墓に葬られる人は四〜五人ということになり、大王山でさえも近くの集落の一般構成員の墓地と考えることはまず困難であり、おそらくこの地域に基盤をおく有力な在地武士層の同族墓・一統墓ととらえるべきであろう。チクマ墓地では初期の火葬墓の集中する第二区の数基の墓を石囲いで区画している。これなどはおそらく一族の同族結合の中心となる祖先の墓を特別に区画したものであろう。いずれにしても、これら宇陀地方の中世墓地を地縁的紐帯によって形成されたものとしてとらえるのはあやまりであろう。在地武士層の一統墓と考えておきたい。

なお、この地域の中世墓地の性格をこのように考えると、大王山墓地の大王寺、シメン坂墓地のシメン寺など隣接して存在する小規模な墓寺の存在はきわめて興味深い。その他の中世墓地についても小規模な草堂が存在した可能性は当然考慮すべきであろう。谷畑墓地でも小量ながら屋瓦が出土しており、近くに小堂が存在した可能性をうかがわせる。

註

- (1) 楠元哲夫「中世後半期における集団墓地」とくにその生成と展開をめぐって」(『末永先生米寿記念献呈論文集』坤 一九八五年)、同「中世集団墓地の地域相―都市と田舎―」(同志社大学考古学シリーズⅢ『考古学と地域文化』所収、一九八七年)など。なお筆者も古く谷畑墓地の調査概要を報告した際、その存続期間を室町初期から末期にわたるものとした。白石太一郎・田坂正昭「榛原町萩原谷畑中世墓地の調査」(『青陵』二四号、一九七四年)。
- (2) 宇陀地方では奈良盆地北部ほど尖頭状五輪板碑の分布は濃密ではないが、宇陀の現存墓地には尖頭形の墓標は少なからずみられる。
- (3) 東京国立博物館編『日本出土の中国陶磁』(東京美術、一九七八年)図版四四―一。なお図版の名称が谷畑古墓出土となっているのは西峠墓地の誤りである。
- (4) 伊藤勇輔「考察―中世墓群」(伊藤勇輔編『大王山遺跡』榛原町教育委員会、一九七七年)。
- (5) 楠元哲夫「中世後半期における集団墓地」とくにその生成と展開をめぐって」(前掲)。

三 現在まで存続する中世墓地

前節では、発掘調査によって実態が明らかにされた宇陀地方のいくつかの中世墓地の資料から、この地域の中世墓地のあり方について検討してみた。ただ、ここで検討を加えたのはいずれもすでに中世末で墓地としての役割を終え、遺跡化した廃絶墓地である。しかしこの地方では、現在も墓地としての機能をはたしている現存墓地のなかに、石塔類の存在などから中世にさかのぼるものがあることが知られている。同じ中世墓地のなかに、中世末で役割を終えた墓地と、その後も現在までその役

割をはたし続けている墓地との二者が存在することは重要であろう。この地域における中世の葬制・墓制のあり方や展開過程を検討するには、発掘された墓地だけでなく、中世以来現在まで続く墓地についても視野に入れて検討する必要がある。

宇陀地方の近・現代の墓制は、両墓制と単墓制が混在するが、さらに近年の火葬化の動きにもなつて両墓制をはじめ葬・墓制自体が大きく変貌をとげつつある。したがってこの地域の現在の墓制はきわめて複雑な様相を呈しているが、ここでは中世以来現在まで存続すると想定される墓地の例として、単墓制をとる大宇陀町栗野の大蔵寺墓地と菟田野町入谷の西上墓地、両墓制をとる大宇陀町平尾の大久保墓地と榛原町小鹿野の墓地の例について瞥見してみよう。⁽¹⁾

(一) 大宇陀町大蔵寺墓地

大宇陀町栗野地区は、宇陀川水系から関戸峠を越えて吉野川水系の津風呂川流域に入ったばかりのところにあり、もとは吉野郡上竜門村に属した。本来は吉野郡に属しわずかに宇陀郡域をはずれるが、上竜門地区は昭和一七年(一九四二)に宇陀郡の松山町、神戸村、政始村と合併して大宇陀町になっているところからも推されるように経済的・文化的には宇陀の一部とみても大過なからう。大蔵寺は栗野の集落から約一キロ北西方の山間にある真言宗豊山派の寺院で、鎌倉中期の本堂や大師堂があり、平安後期の仏像も数多くこのころ。墓地は寺域のすぐ東方にあり、栗野地区の共同墓地として大蔵寺ではなく地元で管理されている。



図13 大字陀町大蔵寺墓地 (1974年撮影)

墓地は西から東南にのびる細長い尾根上に立地し、尾根上約一〇〇メートルの長さの範囲が墓地となっている(図13)。尾根の付け根の西端部に広場があり、広場の東側の円形の土壇の上に南朝の正平六年(一三五五)の銘をもつ五輪塔があり、その周辺や背後の尾根上が栗野地区の墓地として利用されている。一九七四年の踏査時点では土葬の単墓制で、ほぼ家毎に区画が定められており、埋葬の三〇七年後にその上に石塔を立てるのが一般的ということであった。広場の北と南には天保、元治など江戸末から昭和前半期の石塔が密集してならび、ある時期に整理された様相を示している。広場の西南に無縁塔が集められており、この中に多くの中世の石塔がみられる。中世にさかのぼるものとしては、一五世紀後半から一六世紀前半に中心があると考えられる小形の組合せ式五輪塔が四四、一石五輪塔が二、屋蓋をもつ箱形石仏が二九数えられた。五輪塔と箱形石仏は大部分榛原石製であるが、一割ほどは花崗岩製で、花崗岩製の五輪塔はあるいはやや新しい時期のものかも知れない。

中世の石塔類がすべて残されているとは考えられないから、本来はさらにその数が多かったと思われるが、この墓地が少なくとも中世後半にはさきにみた遺跡化した中世の廃絶墓地と同じような景観を呈していたことは疑いなかろう。また昭和四二年に正平の五輪塔のある土壇の東南方の墓地の無縁石塔を集め、広場の西南の山際に整理した際に火葬の蔵骨器と判断される一三世紀前半の美濃須衛窯の四耳壺(図20)、一四世紀中頃の信楽壺(図21)が採集されており、この墓地も中世前半には火葬墓が営まれていたことが知られるのである。さらに興味深いことは、墓地

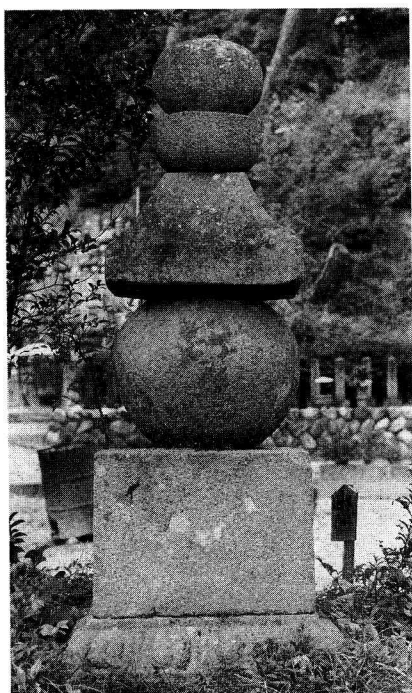


図14 大宇陀町大蔵寺墓地の正平6年五輪塔

の一角に、前述の正平の五輪塔が存在することである。台座を含めた高さは、一・六一メートルで、この地域の中世墓地の小形の組合せ式五輪塔に比較すると明らかに一まわり大きい(図14)。地輪の側面に「正平六年／六月日建立／如件 敬白」の刻銘がある。大和や河内の大きな惣墓には鎌倉期の大型五輪塔が墓地の総供養塔として立てられている例が少なくないが、大蔵寺墓地のこの五輪塔も墓地の総供養塔としての性格をもつものであろう。個々の墓に小形の石塔類が立てられる以前、墓地のシンボルとしての役割をはたしたものであろう。

このように大蔵寺墓地は、美濃須衛の蔵骨器の出土や正平の五輪塔の存在から、すでに一三から一四世紀には墓地として機能していたことが確実であり、さらに中世の前半期には火葬墓が営まれていたことも明らかで、発掘調査の行われた谷畑墓地、シメン坂墓地、チクマ墓地などと

基本的には同じような性格の墓地であったことが知られよう。さらに廃絶墓地では他所に移されたためか遺存しない大型の総供養塔が今も守られており、廃絶中世墓地の多くもとはこうした総供養塔をもっていた可能性を推測させるのである。

この墓地を共同墓地として利用している大字栗野地区は、昭和六〇年の国勢調査時には戸数八〇世帯で、これは明治一四年の調査時と変わっていない。なおこの墓地では、一九八〇年旧墓地の尾根の北側に大規模な新墓地が造成され、大蔵寺関係者と戦没者の石塔及び無縁のもの以外の石塔はすべて家ごとの区画に移され、またすべて火葬になっている。

(二) 菟田野町入谷西上墓地

菟田野町入谷^{にゅうたに}は、中世には興福寺大乘院領の丹生谷庄のおかれたところで、芳野川の支流入谷川に沿った村落である。昭和四〇年の国勢調査時の戸数は一二戸である。西上墓地は、この旧入谷村の共同墓地として現在も利用されている。墓地は北から南へのびる細長い尾根の上に立地し、その長さは八〇メートルに及ぶ。一九九二年現在も土葬で、埋葬は南北に長い尾根上の西側の肩の部分に、各家ごとに定められた場所に行われ、そのすぐ前方に石塔類がやはり家ごとにまとめて立てられている(図17)。『菟田野町史』ではこれを両墓制の一類型として理解しているが、いかがであろうか。⁽³⁾

また尾根の南端部には、一辺六メートルほどで三段築成の方形の壇が造られ、その上にやや大きな五輪塔が置かれ、その周囲に中世の石塔類



図15 菟田野町入谷西上墓地の「金兵衛さん」

が集められている。地元ではこの石塔群を「金兵衛さん」とよんでいる(図15)。中央の五輪塔は、高さが一・〇八メートル(本体のみ)あり、銘はない(図16)。大蔵寺の正平の五輪塔にくらべると小規模であるが、この地域の中世墓地の小型五輪塔にくらべると明らかに大きく、やはりこの墓地の総供養塔の性格をもっていたと考えることができよう。大蔵寺例に比較すると、火輪の軒の端部の上方への反りが著しく、地輪も幅に対して高さが増していて、後出のものであることは確実であるが、空風輪の形態などからも一六世紀まで下がるものとは考えられない。小型の組合せ五輪塔が盛んに造立される時期のごく初期のもの、すなわち一五世紀中ごろのものと考えて大過なからう。そのまわりの方形壇上には、組合せの小型五輪塔が三五、屋蓋をとまなう箱形石仏が三二、尖頭形ないし舟形の光背をもつ石仏が六、一石五輪塔が二、さらに宝篋印塔の一

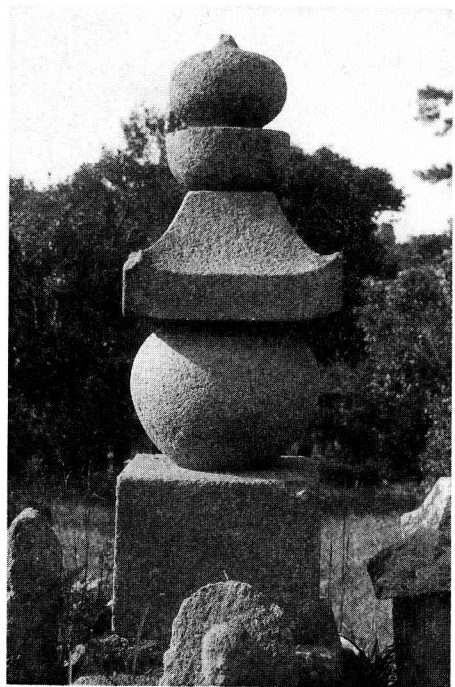


図16 菟田野町入谷西上墓地の大型五輪塔



図17 菟田野町入谷西上墓地

部などもみられる。さらにその北側に展開する現在の墓地の石塔列の中にも中世にさかのぼるものが少なくなく、組合せ式五輪塔が六、箱形石仏が一四も数えられる。両者を合わせると小型五輪塔が四一、箱形石仏が四六になる。

西上墓地では、火葬墓の有無については明らかにしないが、少なくとも石塔類のあり方については、大蔵寺墓地と共通するところが多い。この墓地にもやや小さく無銘であるが、通有の小型五輪塔とはその性格

を異にし、墓地の総供養塔としての役割をもつと推定できるやや大型の五輪塔がある。一方個々の墓には一五世紀後半から一六世紀前半には多くの小型五輪塔が、さらに一六世紀後半には箱形石仏が墓上に立てられていたらしい。したがって中世の後半には発掘された中世墓地と同じ景観を呈していたこ

とは確かであろう。またこのことは、西上墓地もまた中世前半にさかのぼり、初期には火葬墓ともなっていた可能性が大きいことを推測させるのである。

なお、この西上墓地では、発掘された廃絶墓地に比べると五輪塔よりも箱形石仏が多いことが大きな相違点であるが、大蔵寺墓地でも五輪塔四四に対して二九と廃絶墓地に比べると明らかに箱形石仏の比率が高くなっている。このことこそまさに存続墓地の性格を表すものにほかならず、また逆に廃絶墓地のほとんどが、箱形石仏の造立期間中の比較的早い時点で廃絶したことを示すものであろう。

(三) 大宇陀町平尾大久保墓地と妙福寺のラントウバ

平尾は大宇陀町の北端に近い宇陀川右岸の集落で、その大久保墓地は「ハカ」とよばれる両墓制にともなう埋め墓で、現在平尾の北の宇陀川左岸の五津の村落と共同の墓地として利用されている。なお、平尾も五津もともに文禄検地帳にみられる近世初頭以来の村落（大字）であるが、宇陀地方にはこうした二つないし三つの村落が墓地を共通にする例がいくつかわかっている。大久保墓地は平尾の集落の北東の丘陵中の山林にあり、入口の新しい表示以外に石塔はまったくみられない。ここでは現在でも土葬による埋葬が行われている（図18）。

一方この埋め墓の「ハカ」に対する詣り墓の「ラントウバ」は平尾では、集落内の北端の丘陵端に位置する妙福寺の庫裏の北側にある。現在の妙福寺は日蓮宗で、この平尾では一村すべて日蓮宗であるという。こ



図18 大宇陀町平尾の大久保墓地

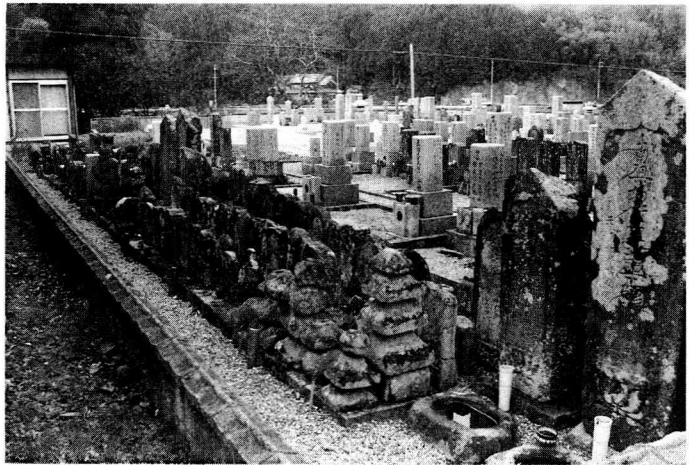


図19 大宇陀町平尾妙福寺裏の詣り墓と集められた古い石塔類

土葬の別はあっても埋葬をとまわらない例はまったくみられないから、この妙福寺の場所も本来は中世の墓地であった可能性が大きいということになる。おそらく近世に入って、五津の村と共同の埋葬地が別に設定され、平尾の有力農民ないし在地武士の墓地であった妙福寺の場所に一村の詣り墓が形成されることになったものと思われる。

なお平尾と同じ様に、埋葬地をこの大久保墓地に求めている五津の村落の「ラントウバ」は、やはり五津の村内高台の上にある地藏庵（アンデラ）とよばれる小堂の隣接地にある。各家ごとに整理された区画に石塔が立ち並ぶが、一石五輪塔が一基みられる以外に中世にさかのぼる石塔類はまったくみられない。

(四) 榛原町小鹿野墓地

榛原町小鹿野は大字萩原に属するが、『宇陀郡史料』などによると旧萩原村が寛永七年（一六三〇）上萩原村と下萩原村に分離、さらに元禄一五年（一七〇二）までに上萩原村は西峠村と小鹿野村に分離、下萩原が単に萩原村となったという。その後明治一九年に再び合併して萩原村にもどっている。伊勢街道添いの宿場町である下萩原に対し上萩原の西

の妙福寺の「ラントウバ」の一角には無縁の石塔類が集められているが、その中には組合式の小型五輪塔が二〇個体分、箱形石仏が一〇ほど認められる（図19）。これら中世にさかのぼる石塔類が本来この場所にあったかどうかは不明であるが、二、三基ではなく相当数の石塔が三〇〇メートルも離れた大久保墓地から運ばれたと考えるよりは、もともとこの場所にあったと考える方が自然であろう。この想定にあやまりがなければ、現在のところ宇陀地方の石塔をとまわらず中世墓地遺跡の発掘例で火葬、

峠や小鹿野は純然たる農村である。この小鹿野、西峠は近世以来両墓制で、この両村の「ハカ」すなわち埋め墓は、小鹿野の集落から南にのびる細長い尾根上にあり、北側の高い方に小鹿野の「ハカ」が、南の丘陵端には西峠の「ハカ」がある。ただこの両村の両墓制は現在大きく変貌しつつある。

小鹿野、西峠の両村とも本来「ラントウバ」は、村落内の住居の近くに家なし一族単位に設けられていた。西峠ではいまもそうした「ラントウバ」が村内にのこる一方で、小鹿野の「ハカ」の南にある「ハカ」に石塔を立てる家が多くなってきている。火葬化がこの動きに拍車をかけている。一方小鹿野では両墓制の原則は守られ、その「ハカ」には一切石塔類は立てられないが、それは「ハカ」と同じ丘陵の北側の高所に近年、村落全体の「ラントウバ」が設けられ、各家単位に整然と石塔の並ぶ詣り墓が整備されたからにはかならない。

この小鹿野の「ハカ」と新しい「ラントウバ」の間は三〇メートルほどしか離れていないが、その中間には戦没者の墓があり、その前に古い無縁の石塔類が並んでいる。そのなかには五輪塔が二〇基ほど、箱形石仏が一一基ほどみられ、それとは別に「元禄十年」のものなど近世の石塔類が一二基の箱形石仏などとともに円形に集積されている。このうち集積された石塔類は新墓地（ラントウバ）の造成時に小鹿野集落の中地の蔵堂にあった無縁の石塔類を一括移したものであるが、それ以外の中世の五輪塔や石仏類は以前からこの場所にあったものという。このことは、この小鹿野の埋め墓である「ハカ」の地が中世から近世初頭のある

段階までは石塔をとまなう単墓制の墓地であった可能性が高いことを示すものであらう。とすれば、小鹿野地区の新しい石塔墓（ラントウバ）の設置は一種の「先祖帰り」とも理解できなくなないのである。

なお、こうした農村地区の上萩原に対し、宿場町的な性格の強い下萩原では両墓制の痕跡すら見いだし難い。街道の東側の北から南へのびる丘陵上に大規模な下萩原地区の地藏山墓地があるが、ここでは近年まで土葬が行われ、また石塔が立てられる単墓制の墓地であった。またその丘陵の南側には融通念仏宗の宗祐寺があり、その境内にも墓地があるが、これもすべて火葬の単墓制の墓地である。さらにこの下萩原の地藏山墓地でも、宗祐寺墓地でも中世にさかのぼる石塔類はほとんどみられない。わずかに宗祐寺墓地の無縁石塔のなかに五輪塔の水輪が三点（うち一点は花崗岩製で新しい可能性も大きい）みられるにすぎない。したがって地藏山墓地、宗祐寺墓地とも近世になって成立した墓地と考えざるをえないのである。宇陀で最大の在郷町であった現大宇陀町の松山には、町の南に不帰堂墓地、北側に味座寺墓地が、また町内の慶恩寺境内にも大規模な墓地があるが、いずれも単墓制の墓地で、しかも中世にさかのぼる石塔がまったくみられない点、下萩原と共通する。

以上、宇陀地方の現在の墓地のうち、中世にさかのぼると思われるいくつかの墓地の状況を簡単にみてみた。このうち少なくとも現在も単墓制の大宇陀町大蔵寺墓地、菟田野町入谷西上墓地はいずれも中世後半には、谷畑中世墓地に代表されるような中世末に廃絶した墓地とまったく同様な墓地景観を呈していたことは明らかであらう。まず立地について



図21 大宇陀町大蔵寺墓地出土の信楽壺
(大蔵寺蔵、高さ22.8cm)



図20 大宇陀町大蔵寺墓地出土の美濃須衛四耳壺
(大蔵寺蔵、高さ29.5cm)

はいずれも尾根上に営まれており、発掘例の多くと共通する。地上部に立てられる石塔類についても小型五輪塔と箱形石仏が中心となっている点も同様である。ただ墓地の中に総供養塔と考えられる通有の小型五輪塔より明らかに大型の五輪塔をとまうところが異なるが、これはすべて中世末頃で廃絶している発掘例では、廃絶する際に他に移されたりしたために失われている場合が多いのではないかと推測される。廃絶墓地の多くでも、個々の墓への石塔の造立に先立ってこうした大型の石塔が墓地の一角に立てられていた可能性は大きいと思われるのである。なお小型五輪塔と箱形石仏の比率が、大蔵寺では四四対二九、西上墓地では四一对四六と両墓地とも発掘された墓地にくらべて箱形石仏の比率が著しく高くなっているところは異なっている。これはまさに発掘された墓地の多くが、箱形石仏の盛行期間のごく初期に墓地としての使用が断たれたことを示すものにほかならないと思われる。

現存墓地では地下構造をうかがうことは難しいが、少なくとも大蔵寺墓地では火葬墓が存在したことが知られており、発掘例では例外なく中世の前半期から中葉には火葬が一般的であったところからも両墓地とも火葬墓から土葬墓への変化を想定しても差支えなからう。両墓地の成立時期については、大蔵寺墓地が一三世紀には成立していたことが、美濃須衛四耳壺(図20)の出土から知られるが、西上墓地については一五世紀以前にさかのぼることを示す資料は今のところ見いだせない。しかし石塔類のあり方をはじめ同じような存在形態を示す発掘例がいずれも一三ないし一四世紀に遡ることからも、西上墓地も中世前半期から出現して

いた可能性はきわめて大きいと思われる。

また両墓地の規模についても石塔が遺存する割合が現存墓地の方が高いことを考えれば、この両墓地の規模が谷畑例などにくらべて特に大規模であったと考える必要はなさそうである。谷畑、シメン坂、チクマ墓地などとほとんど同規模の墓地であったと考えておきたい。とすれば大蔵寺墓地、西上墓地についても、発掘墓地について想定したように、この地の在地武士層の一統墓と考えるべきであろう。中世の宇陀で秋山氏とともに大きな勢力をもった沢氏関係の文書のなかに大永七年（一五二七）、沢氏の「若子様」が宇陀水分神社の祭礼で頭役を勤めた際の酒樽献納記録である「樽引付」がみられるが、そのなかに沢氏の同名衆あるいは与力であったと考えられるグループの中に「丹生谷殿」の名がみられる。⁽⁴⁾ また大蔵寺のある栗野のすぐ南は、中世前半にこの地域で有力であった牧氏の本拠地であり、栗野にもこれをささえた有力在地武士の存在が想定されよう。

このように大蔵寺墓地や入谷墓地をこの地の在地武士層の一統墓と考えた場合、現在の両墓地がそれぞれの地域の共同墓地となっていることと齟齬をきたすようにみえるが、これはその村の有力な名主ないし在地武士層の一統墓の周辺に、付近の一般農民の墓が営まれるようになり、次第に地縁的な墓地に変質していったものであろう。有力者の墓地の周辺に一般庶民の墓が展開し、それが現在の共同墓地へと展開していく例は、奈良盆地部でも数多く知られている。⁽⁵⁾ さきにみた発掘例などから考えると、宇陀地方の場合その変質は中世以降、近世に入ってからのものである。

事であろう。

一方、現在両墓制をとっている墓地については、石塔を立てる場所と埋葬地が異なるため中世以来の変化を追跡するのが困難である。しかしさきに検討したように大宇陀町平尾の埋め墓大久保墓地については中世までさかのぼるかどうかはわからないが、詣り墓の妙福寺墓地については石塔類の存在から、この地が中世の埋葬地であり、石塔造立場所でもあった可能性も考えられる。また榛原町小鹿野墓地の場合は逆に現在の埋め墓に近い場所に石塔をとまなう埋葬地が存在した可能性が考えられる。いずれにしても石塔類の移動をまったく否定することはできないから、両墓制成立以前の墓地の位置を現在確定することは困難であるが、少なくともこれらの墓地が、中世に始まること、それはおそらく中世の大蔵寺墓地や入谷墓地、さらには発掘された中世墓地に近い墓地景観を呈していたことは疑いなかろう。

註

- (1) 本稿の記述は主として一九七四年に行った筆者の踏査のメモによるが、本稿の執筆のために一九九二年に実施した補足的な踏査によったところもある。いずれにしてもこの二〇年足らずの間におけるこの地域の葬・墓制の変貌ははなはだしく、また現在さらに大きく変貌をうけつつある。民俗学的な記録保存調査の必要性を痛感した。
- (2) 出土の場所や経緯については大蔵寺前住職川井宝光師の教示による。なお、この資料の存在は十数年前に堀田啓一氏の教示によって知った。
- (3) 松本俊吉「民俗―人の一生―」『墓田野町史』一九六八年。このほか『榛原町史』（一九五九年）、『大宇陀町史』（一九五九年）、『奈良県史』第一二巻 民俗上（名著出版社、一九八六年）などいずれもこの地域の墓制を

両墓制として単墓制の存在にふれず、その複雑な実相をとらえていない。

(4) 西山克「中世の大字陀」(『新訂大字陀町史』一九九二年)。

(5) 吉井敏幸「一の谷遺跡の歴史的性格について」(『歴史手帖』一四卷一一号、一九八六号)。

四 中世宇陀における葬・墓制の展開

宇陀地方の中世墓地には、一六世紀の後半頃で廃絶した墓地と、その後も存続し現在にまでつながる墓地の二者が存在する。小論で検討したかぎりでは、この二者は少なくとも中世の段階では、基本的に共通の墓地景観、内容、性格をもつものであったと思われる。しかしながらこうした中世墓地の成立時期やそこでの埋葬の実態を知るには現存墓地の表面的調査では大きな限界があつて廃絶墓地の発掘結果によるほかに、逆に近世への展開過程や多くの墓地の廃絶の理由などについては現存墓地のあり方にその理由をさぐるほかない。いずれにしても両者の総合的な検討がどうしても必要である。以下、前節までの検討結果にもとづき、両者を総合してこの地域における中世の葬制・墓制の展開過程の一端について考えてみることにしよう。

この地域の中世墓地は、いずれも一三世紀ないし一四世紀に出現し、その大部分は少なくとも一六世紀末まで存続した。このことは、この地域の墓地の歴史的展開過程のなかで、一三世紀から一六世紀までの間を一つの時代として捉えうることを物語る。この時期の墓地を中世墓地として把握することが出来るのである。それではこの中世墓地の成立はこ

の地方の葬墓制の展開過程のなかでいかなる意味をもつものであろうか。この問題を考えるには、これら中世墓地がいずれも火葬墓として出現していることに注意する必要がある。この地方の一〇世紀から一二世紀の頃の葬・墓制については不明な点が多いが、大王山西尾根にみられるように伸展葬ではない土葬墓がある一方で、能峠南山の主脈上の古墳の横穴式石室を利用した火葬が一二世紀に盛んに行われていたりする。また一二世紀前後に近畿地方の各地で、古墳の横穴式石室を埋葬空間として再利用することが盛んに行われたことは、ひろく近畿各地の横穴式石室からこの時期の瓦器碗などの出土がみられることから明らかである。この石室を利用した埋葬は、遺骸を石室の空間内に収めるものであつて地中への埋葬とは意味が異なる。これはむしろ死体の遺棄ないし骨化のための仮埋葬ともいうべきもので、近くに利用できる石室などがない場合には当然山中などへの遺棄に近い行為になったものと考えざるをえない⁽¹⁾。いずれにしてもこの時期には、さまざまな土葬、火葬、風葬的な葬送、死体遺棄などさまざまな遺骸処理が行われており、普遍的な葬・墓制の存在を想定するのは困難というほかない。

そうした状況のなかで一三世紀頃、宇陀地方の各地で在地武士層ないし有力農民層が一斉に火葬墓を営みはじめる背景には、こうした火葬の普及に努めた人々の存在を考えざるをえない。それらの火葬墓地にやがて五輪塔が造立されることは、この火葬の波及が仏教と無関係ではなかったことを示すものであろう。この点については細川涼一氏が、大和や河内で律宗の下級僧侶が死者の火葬、埋骨などの葬送活動を行うことに

よって、顕密仏教の葬祭を民衆に普及させる役割をはたし、惣墓の成立ともかわることを論じておられる。⁽³⁾ 宇陀の山間部における火葬墓地の成立も、こうした下級僧侶などの活動と無関係とは考えられないのである。同じ大和でも「国中」の平野部では、やがて惣村・惣郷などとよばれる村落共同体の形成と関連して大型の惣墓が形成されるが、その核となる有力在地武士層の墓地はいずれも一三・一四世紀には成立していたものと想定される。こうした動きは山間部の宇陀地域で同様であったと思われる。シメン坂墓地のすぐ下にシメン寺が、大王山墓地に隣接して大王寺が存在するのまたこうした中世墓地の成立と中世仏教との密接な関わりを物語るものであろう。なお同じ「山中」の大和高原でも都介野村の来迎寺には、この地域の在地武士や名主層によって共同人会墓地、すなわち惣墓が成立していることは注目すべきであらう。⁽³⁾

ところが一五世紀になると、本来火葬墓として成立したこれらの中世墓地なかに、土葬を採用するものが多くなってくる。この時期の土葬には、いずれも方形の箱形棺を用いた西向きの側臥屈葬という一定の形式が成立していることが注目される。この土葬への転換の理由は不明であるが、一六世紀になると火葬より多くなり、近世の土葬の時代に近づいていく。ただし近世の桶状の棺による座臥屈葬とは葬法が明らかに異なることに注意しておく必要がある。さらに一五世紀頃の変化で重要なことは、墓地の総供養塔とは別に、個々の墓に小型の五輪塔が立てられるようになることであらう。こうした石塔をともなう墓のなかには女性や子供のものもみられることは、こうした墓地が在地武士や名主層の家

族墓的性格を持っていたことを示すものにはかならず、血縁関係が墓地形成の紐帯となっていること、さらにその一方で、一統墓、家族墓であってもそのなかでの個々人の自立がある程度認められるようになってきたことを示すものであろう。石塔造立の単位はあくまでも個人墓なのである。

さらに一六世紀後半になると、この地方の中世墓地は大きな転機を迎える。この時期を境に中世墓地の多くが廃絶し、また存続するものも大きく変容を遂げるのである。この大きな変化が、戦国の世の終了にともなう織豊政権による支配秩序の再編成と関連することは確かであらう。

天正一三年（一五八五）は大和にとっては革命の年であったという。⁽⁴⁾ 豊臣秀吉の弟秀長が大和の領主となり、古い国侍を一掃してしまう。まさにこの前後を境に宇陀各地の在地武士層がそれぞれ営み続けてきた一統墓の多くが廃絶ないしは大きく変貌するのである。ただ、中世墓地の大きな変化の直接的な契機が、豊臣氏による旧勢力の一掃にあったことは確かであるが、この時期の墓地の再編成が単に支配秩序の変化だけによるものでなかったことも注意されなければならない。

榛原町の萩原地区では谷畑墓地がこの時期で廃絶するが、その直後から伊勢街道を挟んだ東側の丘陵上に地藏山墓地が、またその南には宗裕寺の境内墓地が成立してくる。すでにふれたようにこの地藏山墓地は現在下萩原地区の共同墓地となっているが、そこでは中世にさかのぼる小型の五輪塔や石仏はまったくみられず、その成立が近世初頭にあることを示している。おそらく谷畑墓地を形成した一統なども一六世紀末以降

この墓地に墓域をもとめたのであろう。こうした村単位の共同墓地の出現の背景に、血縁を紐帯とする墓地から地縁を紐帯とする墓地への大きな変化を読み取ることができるのである。宇陀地方の近世から現在にいたる墓地の基本的な形態は、近世初頭の「村切り」によって確立される「村」すなわち現在の大字を単位にするものである。少なくとも埋め墓はこうした村ないし二、三の村が共同で営むものが多い。もちろんそうした村墓以外にも、村の下部単位である垣内墓も少なくなく、さらに同族単位の一統墓、家族単位の家墓もみられなくはない。しかし基本的には村ないし垣内といった地縁的な紐帯によって形成される墓地が中心となるのである。

こうした血縁を紐帯とする墓地から地縁を紐帯とする墓地への大きな変化が、中世末、近世初頭に生じたものであることは疑いなかろう。それは新しい地縁的な墓地が近世の村を単位とするものであることからうなずける。大蔵寺墓地や入谷西上墓地などはこの時期を境に有力な名主層の一統墓から村の共同墓地に変化したのであろう。また両墓制をとる小鹿野墓地や平尾の墓地などの場合も、両墓制の採用にともなって埋め墓ないし詣り墓の場所の移動はあっても、基本的には同じ様な変化を想定できよう。すなわち、一三世紀以来の在地武士層の一統墓のなかには、地域の共同墓地として被葬者層を拡大することによって存続したものと、そうした転換がはかられずに廃絶するものがあったことになる。

この時期、こうした墓地の再編と関連して生じるのは、葬制そのものの大きな変革である。この宇陀地方は、両墓制と単墓制の混在地域で、

現在も大きく変貌をとげつつあるとはいえず、両墓制を守る地区も少ない。ただこの地域で発掘をとまなう調査が行われた中世の墓地はすべて単墓制であった。一方、さきにふれた榛原町シメン坂中世墓地から三〇メートルほど離れた尾根上で二〇基ほどの近世の土墳墓が調査されており、石塔などの外部表象がまったくみられないところから一時期の埋め墓の可能性が考えられる。これらの土墳墓はいずれも座位屈葬の円形土墳で、桶状の棺をとまなうものと思われる。こうした座位屈葬の円形土墳はシメン坂中世墓地でも少数みられ、中世末期ないし近世初頭には出現していたことが知られる。このシメン坂の近世墓地は一七〜一八世紀のものと想定されているから、これが両墓制の埋め墓と考えてよければ、一七世紀には両墓制が成立していたことになる。

両墓制への転換が一七世紀頃に行われたと考えると差支えなければ、その契機は、当然さきにみた中世末〜近世初頭のこの地方における墓地の再編成、すなわち血縁関係を紐帯とする墓地から地縁関係を紐帯とする墓地への変化と関連するものであろう。遺骸の処理は村を単位に、共同の埋め墓への埋葬という形で行われることになった。しかし死者の霊に対する祀り、すなわち祖先の祭祀はあくまでも家を単位とするものであったと思われる。遺骸の処理を村で行い、一方死者の霊の祭祀を家で行うとすれば、そのことによって生じる矛盾の一つの解決の方法として葬地と祭地の分離が生じたのではなからうか。さきにみた平尾の妙福寺の詣り墓(ラントウバ)は、一村すべてが日蓮宗というこの地域ではやや特異な例であって、一般にこの地方の両墓制の詣り墓は、家の近くに家

ないし一族単位に設けられている。

なおこの場合、遺骸の処理を村の相互扶助の一貫として行う伝統はおそらくこの地方の農村では近世以前からあったものと思われ、一方中世には在地武士層ないし在地の有力農民層の一統墓で行われていた石塔の造立による死者の供養ないし祖先の祭祀が一般農民層に及んだ結果、こうした矛盾が生じるようになったのではなからうか。この地方でも在郷町の松山やそれに近い性格をもつ萩原などで両墓制が生じなかったのは、村共同体による遺骸処理の伝統がこうした町ではなかったか、あるいは違った形でしか存在しなかったからであろう。また大蔵寺墓地や入谷西上墓のように中世の在地武士層の墓地を核にして村の墓地が形成されたものに単墓制をとるものが多いことは、これらの村では村の結合の中核となった特定の家との関係が重視されたためであろう。

両墓制の成立については、さらに多方面からの検討が必要であるが、宇陀地方の中世墓地の発掘調査の成果とこの地域の現在の墓地のあり方を総合して考えると、こうした仮説が提起されるのである。

考古学的な発掘資料の検討とともに、現在まで存続する中世以来の墓地の調査をさらに組織的に進め、その両者を総合することによってはじめて中世から近世に至る葬制・墓制の実態を鮮明にすることができよう。小論はその予察的な検討を宇陀の地を例に試みたものである。考古学に偏った独善的な解釈が少なくないと思われるが、きびしい批判がいただければ幸いである。

なお、蔵骨器のうち陶器類の産地と年代については吉岡康暢氏の指示

を受けたところが少なくない。記して負うところを明らかにし、謝意を表しておきたい。

註

- (1) 中世における風葬や死体遺棄については、勝田至氏の研究がある。勝田至「中世民衆の葬制と死穢―特に死体遺棄について―」(『史林』第七〇巻三号、一九八七年)。
- (2) 細川涼一『中世律宗寺院と民衆』(吉川弘文館、一九八七年)。
- (3) 竹田睦洲『民俗仏教と祖先信仰』(東大出版会、一九七一年)。
- (4) 永島福太郎「近世の大宇陀」(『大宇陀町史』一九五九年)。
- (5) 井上義光ほか『野山遺跡群』Ⅰ(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第五九冊、一九八九年)。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

Medieval Graveyards in the Uda Region, Nara Prefecture

SHIRAISHI Taichirō

Recent excavations and investigations have made clear all aspects of some medieval graveyards in Uda, located in the southeast mountains of the Nara Basin. In addition to these graveyards which fell into disuse at the end of the Medieval Ages, there remain in this region other graveyards that have been continued in use since the Medieval Ages until the present day. The author, in this paper, integrates these two types of graveyards and examines the process of development of the funeral and grave systems in the Uda Region in the Medieval Ages.

Examples of graveyards the overall image of which has been clarified through excavations and investigations are: Tanihata Graveyard, Daiōyama Graveyard, Yukitōge-minamiyama Graveyard, Noyama Graveyard, and Shimenzaka Graveyard, all of Haibara-chō, and Chikuma Graveyard in Ōuda-chō. The number of graves in each graveyard range from 20 or 30, up to 90; they all have a square area on the surface covered with stones, and most of them seem to have had stone towers such as *gorintō* (gravestone composed of five pieces piled up one upon another) or box-type stone Buddhist images, erected on top of thos. Underground, beneath this stonework are crematory graves in which cremated ashes were placed to rest, facilities for cremation, burial graves, etc. These graves were used roughly from the 13th to the 16th centuries. There were more crematory graves before the 15th century and more burial graves thereafter. Stone towers also seem to have been erected from the 15th century on; from the 15th to the early 16th centuries *gorintō* were used, and in the later 16th century box-type stone Buddhist images were used.

Among the medieval graveyards that remain in use from the Medieval Ages to the present day, the graveyard of the Ōkura-ji Temple in Ōuda-chō contains 30 to 40 small *gorintō*, and the same number of box-type stone Buddhist images from the Medieval Ages, together with a large *gorintō* erected in *Shōhei* 正平 6 (1351), as a general memorial tower for the whole graveyard. Cinerary urns for cremated ashes have also been discovered in this graveyard, which indicates that crematory graves were maintained in the Medieval Ages. On the other hand, 40-odd small *gorintō* and a similar number of box-type stone Buddhist images, as well as a large *gorintō* in one corner, remain in Nishigami Graveyard at Nyudani, Utano-chō. There are a considerable number of medieval graveyards that have been conserved to the present day, and in the Medieval Ages they all seem to have been similar in appearance, content and character to the excavated graveyards. It is also considered possible that large *gorintō* once existed in the medieval graveyards that have been excavated, and that such large *gorintō* were erected as the symbol of the whole graveyard, before small *gorintō* were erected in the later Medieval Ages.

All these medieval graveyards in the Uda area are thought to have been the family

graves of local warriors and influential farmers of this area. Behind the fact that crematory graveyards of this kind came to be administered in the 13th and the 14th centuries, there may have been active approaches by lower priests of the *Ritsushū* 律宗 or other sects. Later, these graveyards gradually changed into burial graves. In the later 16th century, when the ruling order changed with the *Oda-Toyotomi* governments, the medieval graveyards of this area, which were chiefly comprised of graves for the local warrior class, faced a revolutionary turning point. Most of them were discontinued, and were integrated into the newly-established village community graveyards; some of them changed into regional graveyards that contained the graves of local common people. The change was from graveyards bound by a blood relationship to graveyards bound by a territorial relationship.

Along with the reorganization of graveyards, the funeral and grave systems also changed dramatically; this was the establishment of the double grave system in which the body was buried in the burial grave of the village, which was separate from the visiting grave of each family. One of the reasons for the establishment of this system was probably to restore the inconsistency between the disposal of the body, which was dealt with by the village as a unit, and ancestor worship, which was carried out in family units. The tradition of disposing of the body as the part of mutual aid within the village seems to have existed before the Early Modern era in the agricultural villages of this area. On the other hand, however, ancestor worship through the erection of stone towers which had been practiced among the local warriors in the Medieval Ages, spread among the common farmers; this resulted in the establishment of the double grave system.